

# 国士舘大学 FD 委員会

## 令和元年度 活動報告書

国士舘大学 FD 委員会

令和 2 年 6 月 1 日



## 目 次

### 国土舘大学FD委員会

|                       |   |
|-----------------------|---|
| 令和元年度活動報告書の提出について（報告） | 1 |
| 副学長・FD委員会委員長 長谷川 均    |   |

### ワーキンググループ提案・活動報告

|                              |    |
|------------------------------|----|
| 第1 ワーキンググループ                 | 3  |
| 「アクティブ・ラーニングの実践例の報告および実践集作成」 |    |
| 第2 ワーキンググループ                 | 9  |
| 「ループリック作成の報告および実践集作成」        |    |
| 第3 ワーキンググループ                 | 15 |
| 「授業改善に向けてのその他の取り組みの報告」       |    |
| FD委員会名簿・ワーキンググループ編成表         | 25 |

### FD委員会活動報告

|                      |    |
|----------------------|----|
| 令和元年度 FD委員会活動報告（全学）  | 29 |
| 令和元年度 FD委員会活動報告（機関別） | 39 |



国士大 F 第 4 号  
令和 2 年 6 月 1 日

学長 佐藤 圭一 殿

FD 委員会  
委員長 長谷川 均

国士舘大学 FD 委員会 令和元年度活動報告書の提出について（報告）

本委員会では、令和元年度もワーキンググループごとに検討課題に取り組むとともに、FD シンポジウム・FD 研修会等の全学的な FD 活動、そして、各学部・研究科・附置研究所の FD 活動についても、精力的に取り組んでまいりました。

各ワーキンググループにおける検討結果について、取りまとめを行い「提言」及び「活動報告」を作成いたしましたので、ここに提出いたします。

つきましては、本報告書に記載いたしました第 1 から第 3 の各ワーキンググループによる提言につき、早期実現に向けご検討いただくとともに、関係諸機関にお取り計らいくださいますようお願い申し上げます。

また、FD 委員会全体の年間活動報告及び学部・研究科・附置研究所 FD 委員会の年間活動報告も本報告書に取りまとめましたので、併せてご高覧くださいますようお願い申し上げます。



## ワーキンググループ提案・活動報告

# 第 1 ワーキンググループ 「アクティブ・ラーニングの 実践例の報告および実践集作成」



## 第1 ワーキンググループ

### 「アクティブ・ラーニングの実践例の報告および実践集作成」

座長 宮原 裕一

#### 1. 提言

##### (1) アクティブ・ラーニング型科目の点検

私立大学等改革総合支援事業タイプ1（令和元年度）において、アクティブ・ラーニング型の開講科目の割合が設問にあり、本学の得点は「0」となっている。

しかしシラバスを見る限り、ゼミナールなどグループワークやプレゼンテーション等を実施する科目において、アクティブ・ラーニングであることが一部で示されていないため、実際にアクティブ・ラーニング型の科目がどの程度開講されているか把握できない。

そこで、まず私立大学等改革総合支援事業タイプ1に該当するアクティブ・ラーニングを含む科目か否か、全科目について点検するようご指示いただきたい。

##### (2) アクティブ・ラーニング環境の整備

アクティブ・ラーニングに利用できる教室（例えば、スタッキングテーブル・チェアやインタラクティブボードの設置・増設など）、容易な Wi-Fi アクセスなどアクティブ・ラーニング環境の整備について、これまで同様、有限な予算のなかでアクティブ・ラーニング環境のバリアフリー化にご尽力いただきたい。

## 2. 令和元年度活動報告

### (1) アクティブ・ラーニング実践例の報告

#### ①公開授業参観記録

公開授業参観者にアクティブ・ラーニングの実践状況を記録してもらうため、「公開授業参観記録」を作成した。本記録は前年度作成の参観記録案に加え、「摂南大学アクティブ・ラーニング事例集」を参照したものである。

#### ②実践例（2019 秋）

2019 年度秋期の公開授業参観記録をもとに「アクティブ・ラーニング実践例」を集約した。主な集約結果は次の 3 点である。①授業開始時の小テストが学生の能動的復習にプラスの面をもたらす。②リアクションペーパーへのコメントが学生の声の見える化につながり学生の能動的学習にプラスの面をもたらす。③学生の思考をアクティブにする教材・教具の事前仕込みが学生の能動的学習にプラスの面をもたらす。

### (2) 他大学のアクティブ・ラーニング実践集

#### ①実践集例

アクティブ・ラーニング実践集を 10 大学収集し、「国士舘大学アクティブ・ラーニング実践集」を作成するうえで必要な内容を集約した。主な集約結果は次の 3 点である。①授業の流れ（京都産業大学では、所要時間の目安を示す）を示す必要がある。②授業内容（専門講義・語学講義・実習・実験・ゼミ等）別モデルが必要である。③アクティブ・ラーニングを実践している教員の導入動機や効果などの体験談を盛り込む必要がある。

#### ②失敗事例

文部科学省の事業で東海 A（教育力）チームが作成の「アクティブラーニング失敗事例ハンドブック」をもとに、これからアクティブ・ラーニングが国士舘大学に広がり深まるときに、どのような躓きの石があるかを知り、授業を設計するさいのケース別アクティブ・ラーニングの問題・対策等についてWG内で情報共有した。

### (3) 今後へ向けての検討

#### ①導入

すべての授業でアクティブ・ラーニングが必要な訳ではなく、受講生数によってはグループワークによるアクティブ・ラーニングは困難であるが、学生の能動的学習を促す授業設計のヒント（例えば、宇都宮大学の「宇大版アクティブラーニングティップス集」）を提供することで、アクティブ・ラーニングが国士舘大学

に広がる契機を作れるのではないかということを検討した。

②ハード面の改善

アクティブ・ラーニングに利用できる教室が少なく、具体的にどのような設備等が必要なのかを検討した。

### 3. エビデンス

(1)「公開授業参観記録 2019」

(2)「摂南大学アクティブ・ラーニング事例集」

(3)「改訂版 アクティブラーニング事例集」

(京都産業大学 教育支援研究開発センターF 工房)

(4)「アクティブラーニング失敗事例ハンドブック」

(文部科学省の事業で東海A（教育力）チーム)

(5)「宇大版アクティブラーニングティップス集」

URL : <http://hae.utsunomiya-u.ac.jp/kiban/tips/index.html>

(宇都宮大学 大学教育推進機構 基盤教育センター)



第2ワーキンググループ  
「ループリック作成の報告  
および実践集作成」



## 第2 ワーキンググループ

### 「ルーブリック作成の報告および実践集作成」

座長 名越 篤史

#### 1. 提言

第2 ワーキンググループ（WG）では、昨年までの第4WGの活動目的である「学修成果の可視化」において重要なツールの1つであるルーブリックについて、各WGメンバーを中心に作成・運用し、それらを集めて実践集を作成することを活動目的とした。まず、ルーブリックの説明とその意義について触れさせていただく。

ルーブリックは、①学生が何を学習するのか（評価の観点）②どの程度達成できたのか（評価の基準）を確認するための評価ツールであり、評価の対象によって課題ルーブリック（プレゼンテーション、レポートなど）、科目ルーブリック、カリキュラムルーブリックなどの種類がある。本WGでは、個々の教員のFD活動による授業改善（学習成果の評価）に直接的に関係する前二者についてとりあげている。

そもそも、ルーブリックが現状のように必要とされるようになった理由として、まず「何を教えたか」から「何を学んだか」への高等教育の大転換により、学習成果を評価するための公正な基準が必要とされたことがあげられる。そして、「知識」だけでなく「基礎的・汎用的能力」を重視する高等教育の質的転換によって、ペーパーテストだけでは測れない能力の評価において極めて優秀なツールであるルーブリックは重要な役割が期待されている。

ルーブリックの評価ツールとしての優位性としては、まずレポートやプレゼンテーションを評価する際の作業の能率化や客観性の担保という直接的な理由が挙げられる。さらに、ルーブリックは教育ツールとしても優秀であり、事前に学生へ配布することで学生に何を学んでほしいか具体的に伝えることが出来ること（行動指針の明確化）や、ルーブリックの作成を学生への課題とすることで学習すべき内容に関してのより深い理解を期待できる。そして、評価観点や基準を客観的に示せるということが、学生や第三者へ評価内容をフィードバックすることが極めて容易であることに繋がる。

このようなルーブリックの利用を学内で広げていくためには、実際に作成した実践集や運用報告を学内で広く周知することは重要である。

## 2. 令和元年度活動報告

本 WG では、メンバーがそれぞれ過去に使用しているルーブリックを提示し、その運用について意見交換を行った。また、一部のメンバーがルーブリック作成をテーマにしたワークショップに参加したり [1]、他大学におけるルーブリック関連の資料を収集したり [2] して、それらの情報を共有した。これらは、FD 委員会や manaba を通して行った。意見交換を通して改良したルーブリックを収集した。収集したルーブリック [3] は、実験レポート、プレゼンテーション（グループ、単独）、PBL 型グループ課題、学習指導案作成、卒論ゼミ、卒業論文など多岐にわたる。

ルーブリックは実際に運用しながら授業・課題や学生に合わせて微調整しながら改良していく必要があるとされる。今年度の WG ではルーブリックの意義や利点に関する意見交換と作成例の収集までに終わってしまった。次年度以降では、ルーブリックを実際に運用した際の報告を付記する形での実践集の作成につなげていきたいと考えている。

## 3. エビデンス

(1) 2019 年 11 月 9 日開催（芝浦工業大学）「ルーブリック評価入門 WS」講義資料 榎原暢久 芝浦工業大学 教育イノベーション推進センター

(2) 「学生用 ルーブリックの使い方ガイド」  
（関西大学 教育推進部 教育開発支援センター）

(3) ルーブリック作成例

- ①「化学実験レポート評価ルーブリック」改良前のバージョンと改良後のバージョン  
理工学部 名越 篤史
- ②「グループ研究 プレゼンテーション評価シート」  
経営学部 佐藤 香織
- ③「プレゼンテーションのルーブリック」  
21 世紀アジア学部 陳 慧
- ④「ルーブリック（評価基準）」（アジア政治論：PBL 型授業）  
政経学部 川島 耕司
- ⑤「音楽科学習指導案 ルーブリック」  
体育学部 三小田 美稲子
- ⑥「ゼミ活動を対象とした学生向けルーブリック」  
法学部 高野 敏春
- ⑦「卒業論文成績評価ルーブリック」改良前のバージョンと改良後のバージョン  
文学部 桜井 美加
- ⑧「法学演習 II」（卒業論文）  
法学部 辰野 文理

⑨「卒業論文ループリック」

経営学部 池元 有一

(4)『第 2WG「ループリック作成の報告及び実践集作成」報告』

(中止となった第 22 回 FD シンポジウム原稿での配付予定資料)



# 第3ワーキンググループ

## 「授業改善に向けての その他の取り組みの報告」



## 「授業改善に向けてのその他の取り組みの報告」

座長 和田 義浩

### 1. 提言

2019 年度の本ワーキンググループの活動を通じて獲得された各種知見に基づき、以下の諸点について提言します。

- (1) manaba 等の「遠隔授業支援システム」と respon 等の「interactive なコミュニケーションツール」を組み合わせ、「反転授業」他の手法を比較的大規模な講義形式の授業においても実現し、「学びの物理的・時間的拡張」と同時に「学びを支える生の意識の共有」を図ることで、大学における組織的教育の全体的意味をより実質的なものにすることが可能であり、そうした多角的授業形態の普及を積極的に推進すべきである。
- (2) 海外からの就労者や留学生の増加という今日の日本社会の動向に鑑み、本学が留学生を受け入れる教育的意味をより深める必要があるとの観点から、留学生と日本人学生の交流機会の充実を、各種教育課程上においても図ってゆくべきである。
- (3) 「専門研究の推進」と「有用な社会人の排出」という、高等教育機関が担う根源的な2つの任務を有機的に総合するための一つの道筋として、本学の各種附置研究所と学部ならびに研究科との連携をより強固にすべく、各種制度を構築・充実してゆくべきである。
- (4) 本学の喫緊の課題である退学者数の抑制という観点から、発達障害ないしは各種精神的問題を背景とした「修学困難者」に対して科学的・専門的知見に基づいて対応するための制度ないしは組織を早急に作ることが必要である。
- (5) 教育活動の制度的根幹をなす「カリキュラム」に関する自己点検について、それを組織的に、効率的かつ継続的に実施し続けなければならないという観点から、関連する作業に対して全学的規模での統一的な「カリキュラムチェックシート」の導入が望ましい。

## 2. 令和元年度活動報告

第3WGは他のWGの活動テーマ以外の「授業改善に向けてのその他の取り組みの報告」を主題とする活動を展開、WGメンバーが所属する各種の報告がなされた。その概略を以下の通り報告する。

### (1)manaba を活用した通常講義形式の授業における「反転授業」の可能性について（取り組み）

本学で導入されている授業支援システム manaba については、授業内での活用も漸進的に広がっている。元来 manaba の諸機能には「広範な」活用の可能性が含まれ、その「広範な」活用は、教員をしていわゆる先進的な教育手法を可能としながらも、いわゆる「講義」を中心とした古典的な教育手法を排除せず、むしろその手法の有効性を強化するものでもあるべきではないか——こうした意識を前提として、本年度は一部授業における respon の機能的有効性の確認ならびに「反転授業」の具体的な可能性と限界に関する各種シミュレーションを進めるにいった。

※今回、立命館大学「manaba 活用ブック vol.2」

[http://www.ritsumei.ac.jp/acd/ac/kyomu/kyotuu/manaba\\_book\\_vol.2.pdf](http://www.ritsumei.ac.jp/acd/ac/kyomu/kyotuu/manaba_book_vol.2.pdf) が大きな参考となった。

### (2)留学生と共に学ぶ意義について——日本人学生と外国人留学生の学び合い（取り組み）

政経学部における初年次教育の基幹科目である「フレッシュマン・ゼミナール」の一部の授業において、異文化理解促進と社会的・人間的視野の広がりを目的に、学部学生と政治学研究科に在籍する留学生との間で交流授業を実施した。身近な「異文化」の存在やそうした存在との交流の重要性に対する意識の醸成につながった。

### (3)附置研究所における FD 活動——イラク古代文化研究所の場合（取り組み）

イラク古代文化研究所では、研究所員が構成するミニ FD 委員会を毎月の所員会に合わせて定例化することとし、本年度は研究所による出版、共同研究、資料整理、展示など諸事業計画の実施状況の点検を行うとともに、グローバルアジア研究科修士課程及び博士課程学生の指導方法や論文の審査方法について議論した。

### (4)出席不良学生への対応と FD 活動——FD 活動の重要性と広範な視野の必要性（提言）

一部の学生が「出席不良」に陥り、その多くが修学中退にいたる現実については、FD 的観点から大きく二つの対策が検討されるべきである。一つは新しい授業手法を効果的に取り入れることで授業改善を図り学生の修学意欲を向上させる「積極的改善策」、そ

してもう一つは学生が抱える個別的問題（精神医学的諸問題）に着目、そうした問題に大学が組織的に向き合う「消極的（悪化防止）改善策」と考える。当該問題への対策として前者のみならず後者を促進することも重要であり、今後諸事例の収集、有効性の検討が進められていくべきである。

## (5)カリキュラムの自己点検に関する効率的手法の構築（提言）

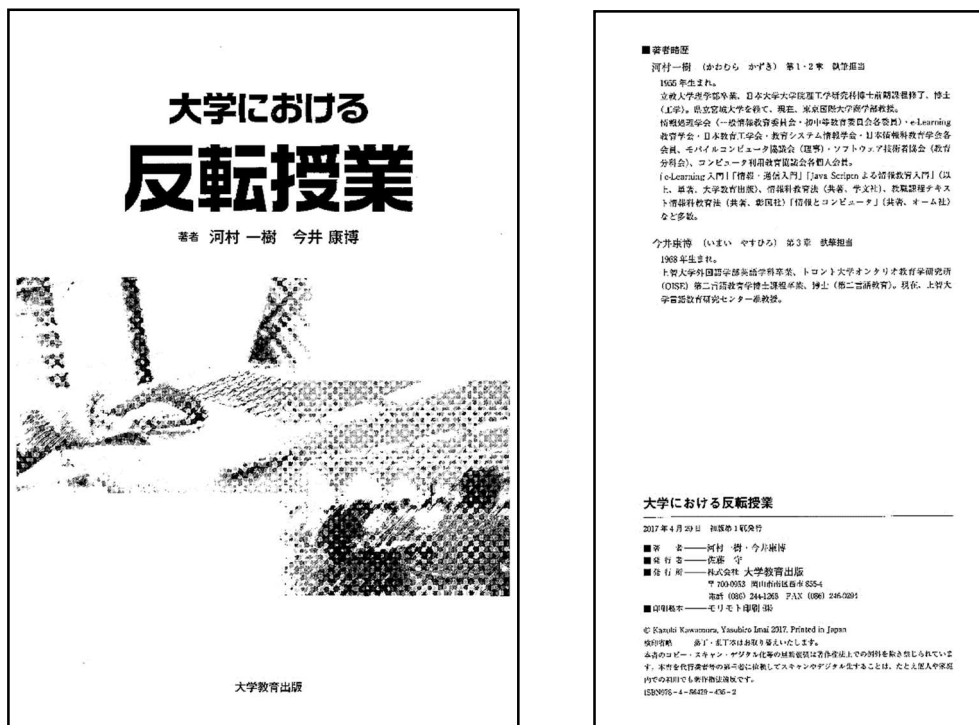
いわゆる 3 ポリシーの実質化が叫ばれるなか、本学では現在 3 ポリシーを具現化する履修系統図の見直しや、DP と CP の関連性に留意したカリキュラムの改善について検討が進められている。現状、関連する各種図表の作成については各機関に委ねられているが、将来的には全学的に統一された「カリキュラムチェックシート」を土台とした有効かつ効率的なシステム構築と自己点検が進められるよう、検討されることが望ましいと考える。

## 3. エビデンス

上掲 1. の提言と 2. の活動報告の内容に関連し、以下の資料を提示します。

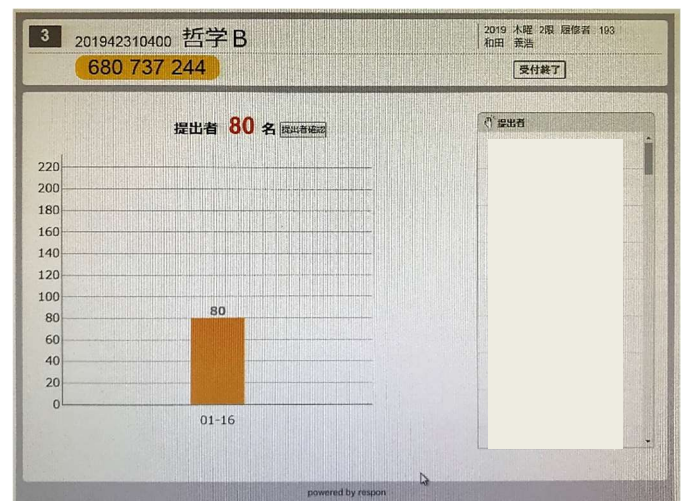
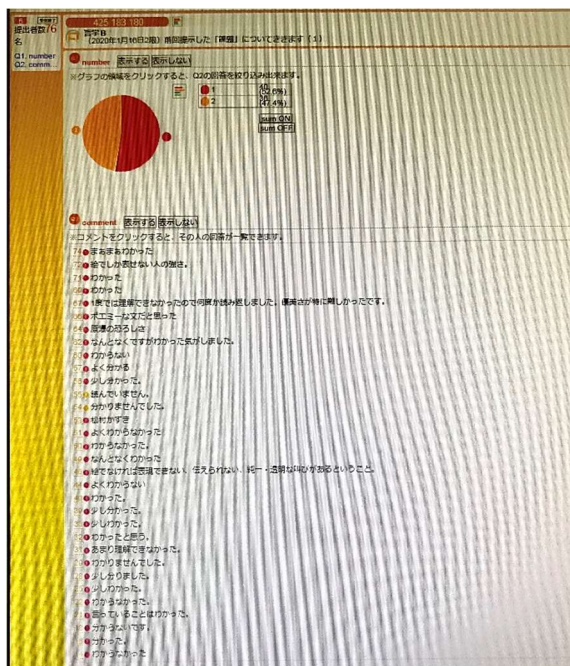
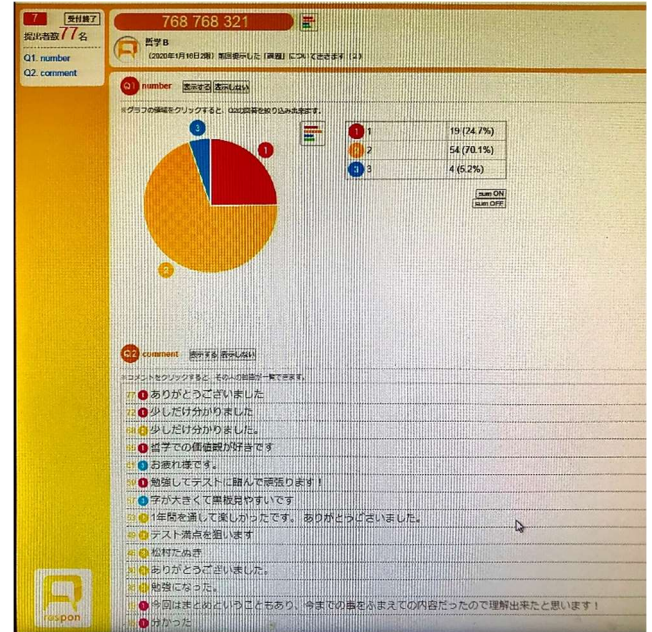
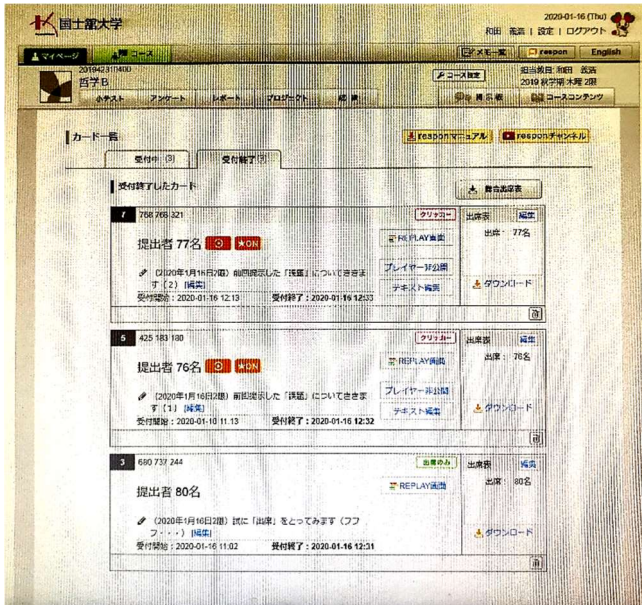
### （1）講義における「反転授業」の実現可能性の検討のための諸資料

#### ①書籍『大学における反転授業』



## ②実際の講義内における respon (manaba における interactive education 機能の一つ) の利用例

※実施者：和田 義浩



## (2) 第6回 FD 委員会第3WG 活動資料 (一部修正)

令和元年度 国士舘大学 FD 委員会 第3WG 所属委員からの報告まとめ(令和2年3月14日時点)

### ●加藤 将貴 委員 (政経学部)

本学では LMS(Learning Management System)として manaba を導入しており、利用されている先生がいる一方で、活用方法が分からないなどの声が聞かれます。そこで、FD の一環として「活用事例」紹介などのイベントや、活用事例集等の発行をするのはどうか。

立命館大学において、活用事例集がございましたので、参考までに添付致します。



manaba活用ブック  
Vol.02\_立命館大学

### ●岡田 保良 委員 (イラク古代文化研究所)

本学 FD 委員会の指針に従い、研究所員が構成するミニ FD 委員会を毎月の所員会に合わせて定例化することとし、本年度は研究所による出版、共同研究、資料整理、展示など諸事業計画の実施状況の点検を行うとともに、グローバルアジア研究科大学院の修士課程及び博士課程学生の指導方法、提出論文の審査方法について議論した。

### ●小池亜子 委員 (政治学研究科)

テーマ：日本人学生と外国人留学生の学び合い

対象授業：政経学部政治行政学科 1 年次 必修科目「フレッシュマン・ゼミナール」

事例の授業内容：

春期のうち 2 回の授業において、異なる文化を理解し、視野を広げることを目的とし、本学大学院政治学研究科修士課程 1 年生留学生との交流授業を実施した。

第 1 回 モンゴル

第 2 回 ベトナム

当該国出身留学生をゲスト講師として、パワーポイントを活用した自国紹介をしてもらい、フレッシュマン・ゼミナール受講生(小池担当クラス 27 名)は、留学生の発表を聞いて、まず個人で考えた質問を、付箋紙を用いたグループワークで整理し、質疑応答を行った。

客観的評価は実施していないため、効果は不明であるが、授業後の学生からの感想や態度から、視野を広げるという目的の一端は果たせたことと、学内の留学生の存在と、交流の意義について、日本人学生に周知できたことが成果である。

## ●宍倉 悠太 委員（法学部）

### 出席不良学生への対応と FD 活動

#### I. 対策の視座

少子化に伴う 18 歳人口の減少の中で、大学入学者数の確保および中退者対策は喫緊の課題となっている。本学でも例外ではない。

入学者数の確保や中退者の減少のためには、魅力あるカリキュラム・講義の分かりやすさ、学生の主体性を重視した学び、予習・復習の工夫など、第一次的には授業改善を積極的かつ継続的に実施していくことが何よりも重要である。他方、学生の中には、発達障害などの問題をはじめ、学生生活に支障をきたす個人的な問題を抱えている者もいる。そうした者への対策は、上記の授業改善だけではならず、本人の問題を支援しながら卒業への支援をしていく体制の構築が別途求められることになる。これはいわば積極的な上記の改善策に対し、学生のドロップアウトやさらなる状態の悪化を防止するための消極的な改善策として位置づけられるものである。さらなる中退者抑制のためには、こうした積極的改善策と消極的改善策の双方を検討していくことが重要であると思われる。以下、この 2 つの観点から対策の在り方について若干の報告を行う。

#### II. 対策の在り方

##### 1. 積極的改善策について

積極的な授業改善については、アクティブ・ラーニングの実践例の積み上げたルーブリックの作成および活用など、他の WG の活動が何より重要である。さらにそれに加え、第 3WG でも検討している授業環境のハード面・ソフト面の整備といった問題や、SA・TA の採用、ICT の活用などを整備することが求められる。さらに効率性を上げることで、教員の研究時間を確保していくことは、より質の高い授業の提供へ貢献するであろう。

##### 2. 消極的（悪化防止）改善策について

積極的改善策の充実化は、修学意欲喪失といった理由でドロップアウトする学生の減少に最も貢献するものと思われる。他方、個別的な問題を抱える学生については、こうした改善策だけでは不十分であり、学生を支援する体制の充実化が求められる。その一つとしては、学生相談室の活用の積極化が挙げられる。以下、相談室の現状に

について確認した結果(\*)もふまえて述べる。

現在本学には各キャンパスに学生相談室が設置されており、スタッフとして心理カウンセラーが5名、ドクターが1名配置されている。この中には本学で10年以上の経験を有するベテランスタッフもあり、相談に来た学生への支援を実施している。

学生相談室の活用としては、(1)啓発活動の積極化と、(2)支援体制のシステムとしての充実化、の2点が挙げられよう。このうち(1)に関する取り組みとして、現在学生・厚生課からは新入生に対し学生相談室の利用案内(リーフレット)の配布をしており、また現在、発達障害の関係の記載を充実化する改訂を行っている。他方、(2)については、①入学時の個別の問題に関するスクリーニングや、②相談室による支援の効果検証、③当該学生に対して相談室・教務・教員の連携の環による支援体制システムを整備していくこと、などが重要になる。このうち①②に関して、現在は学生の個人情報保護の観点から本人に不利になるような情報の調査や抽出・目的外利用といったことは制限されており、その実現には困難が伴う。適正性の観点から本人の同意を得ることが必要になるが、例えば他大学の取り組みなどを参考に、本学でも実行可能な諸条件を整えていくことが今後の検討課題となるであろう。

他方、③に関して、現在は学生相談室を所管する学生・厚生課内において、相談室のスタッフと学生部長及び学生・厚生課職員との間でのカンファレンスを毎月実施している。さらにその結果については、カウンセラー、精神科医が緊急を要すると判断した案件についてのみ教務課ないし各学部の学生主任に連絡をする運用となっているが、フィードバックされた情報を当該学生の講座の担当教員や学年担任等に通知するかどうかについては、連絡を受領した者の裁量に任されている部分もあるという。学生の支援体制のさらなる充実化のためには、こうした運用について検証し、さらに適正・有効なシステムを構築していくことも検討に値するものと思われる。

最後に、こうした改善策の推進のためには、各学部間の状況を共有し横断的に検証する体制を構築するとともに、例えば中退者減少のための具体的な数値目標などを提示していくことも重要になるであろう。

(\*) 2020年3月2日(月)にFD委員宍倉が学生・厚生課を訪問しお話を伺った。

## ●その他(本文書に掲載のないもの)

### ・河野 寛 委員(文学部)

カリキュラムにおける諸科目の位置づけ(特にDPとの関連性)を明確化するための手段としての図表作成の具体的事例、課題等について、諸学部の事例をもとに検討・

考察いただいています。

→現在、改めて全学的に進められているカリキュラムの見直し作業に直接関係するテーマです。

・和田 義浩 委員（法学部）

通常講義における「反転授業」の可能性と課題について、特に **manaba** の機能である **respon** の活用を通じて体験的に考えることをテーマとして取り組みを進めており、次年度に向けて鋭意検討中です。

FD 委員会名簿・  
ワーキンググループ編成表



## FD 委員会 委員名簿（令和元年度）

平成 31 年 4 月 1 日現在

| 根拠規程                          | 推薦母体          | 所 属          | 職名   | 氏 名     |
|-------------------------------|---------------|--------------|------|---------|
| 第 2 条第 1 項<br>第 1 号           | 副学長<br>(職務指定) | 法学部          | 教授   | 飯田 昭夫   |
| 第 2 条第 1 項<br>第 2 号           | 各学部教授会        | 政経学部         | 准教授  | 加藤 将貴   |
|                               |               | 体育学部         | 教授   | 三小田 美稲子 |
|                               |               | 理工学部         | 准教授  | 名越 篤史   |
|                               |               | 法学部          | 講師   | 穴倉 悠太   |
|                               |               | 文学部          | 教授   | 桜井 美加   |
|                               |               | 21 世紀アジア学部   | 教授   | 濱田 英作   |
|                               |               | 経営学部         | 講師   | 佐藤 香織   |
| 第 2 条第 1 項<br>第 3 号           | 各研究科委員会       | 政治学研究科       | 准教授  | 小池 亜子   |
|                               |               | 経済学研究科       | 教授   | 生方 淳子   |
|                               |               | 経営学研究科       | 教授   | 宮原 裕一   |
|                               |               | スポーツ・システム研究科 | 准教授  | 永吉 英記   |
|                               |               | 救急システム研究科    | 准教授  | 羽田 克彦   |
|                               |               | 工学研究科        | 教授   | 小田井 圭   |
|                               |               | 法学研究科        | 教授   | 高野 敏春   |
|                               |               | 総合知的財産法学研究科  | 教授   | 武田 典浩   |
|                               |               | 人文科学研究科      | 准教授  | 千葉 昇    |
|                               |               | グローバルアジア研究科  | 教授   | 陳 慧     |
| 第 2 条第 1 項<br>第 4 号           | 各附置研究所<br>所員会 | イラク古代文化研究所   | 教授   | 岡田 保良   |
|                               |               | 武道・徳育研究所     | 准教授  | 小森 富士登  |
|                               |               | 防災・救急救助総合研究所 | 講師   | 月ヶ瀬 恭子  |
| 第 2 条第 1 項<br>第 5 号<br>(職務指定) | 学長室長          | 法学部          | 教授   | 入澤 充    |
|                               | 教務部長          | 法学部          | 教授   | 辰野 文理   |
|                               | 教務部事務部長       | 教務部          | 事務部長 | 美納 清美   |
| 第 2 条第 1 項<br>第 6 号           | 学長が委嘱した者      | 政経学部         | 教授   | 川島 耕司   |
|                               |               | 体育学部         | 准教授  | 井上 善弘   |
|                               |               | 法学部          | 教授   | 和田 義浩   |
|                               |               | 文学部          | 准教授  | 河野 寛    |
|                               |               | 経営学部         | 准教授  | 池元 有一   |

# ワーキンググループ(WG)名簿

平成 31 年 4 月 1 日現在

| 第 1 WG |            | アクティブ・ラーニングの実践例の報告および実践集作成 |    |              |        |
|--------|------------|----------------------------|----|--------------|--------|
| 座長     | 所属         | 氏名                         | 座長 | 所属           | 氏名     |
| ◎      | 経営学研究科     | 宮原 裕一                      |    | 経済学研究科       | 生方 淳子  |
|        | 体育学部       | 井上 善弘                      |    | 人文科学研究科      | 千葉 昇   |
|        | 法学部        | 入澤 充                       |    | 防災・救急救助総合研究所 | 月ヶ瀬 恭子 |
|        | 21 世紀アジア学部 | 濱田 英作                      |    |              |        |
|        | 工学研究科      | 小田井 圭                      |    |              |        |
| 第 2 WG |            | ループリック作成の報告および実践集作成        |    |              |        |
| 座長     | 所属         | 氏名                         | 座長 | 所属           | 氏名     |
| ◎      | 理工学部       | 名越 篤史                      |    | 経営学部         | 池元 有一  |
|        | 政経学部       | 川島 耕司                      |    | 経営学部         | 佐藤 香織  |
|        | 体育学部       | 三小田 美穂子                    |    | 法学研究科        | 高野 敏春  |
|        | 法学部        | 辰野 文理                      |    | グローバルアジア研究科  | 陳 慧    |
|        | 文学部        | 桜井 美加                      |    |              |        |
| 第 3 WG |            | 学生の FD 活動への取り込み            |    |              |        |
| 座長     | 所属         | 氏名                         | 座長 | 所属           | 氏名     |
| ◎      | 法学部        | 和田 義浩                      |    | スポーツ・システム研究科 | 永吉 英記  |
|        | 政経学部       | 加藤 将貴                      |    | 救急システム研究科    | 羽田 克彦  |
|        | 法学部        | 穴倉 悠太                      |    | 総合知的財産法学研究科  | 武田 典浩  |
|        | 文学部        | 河野 寛                       |    | イラク古代文化研究科   | 岡田 保良  |
|        | 政治学研究科     | 小池 亜子                      |    | 武道・徳育研究所     | 小森 富士登 |

## FD 委員会活動報告

令和元年度

FD 委員会活動報告（全学）



## 1. FD 委員会

第 1 回（令和元年 5 月 25 日）

議題 1（報告事項）

- ・令和元年度 FD 委員会委員について
- ・平成 31 年度採用教員に対する研修及び学園紹介について
- ・各機関の FD 活動について

議題 2（連絡事項）

- ・令和元年度 FD 委員会等日程について
- ・平成 30 年度活動報告書について
- ・令和元年度 FD 事業計画書について
- ・令和元年度 春期授業公開・授業参観について
- ・国士舘大学 第 21 回 FD シンポジウムについて

議題 3（審議事項）

- ・令和元年度 ワーキンググループの編成について

議題 4 各ワーキンググループの活動について

議題 5 その他

第 2 回（令和元年 7 月 13 日）

議題 1（報告事項）

- ・国士舘大学 FD 委員会平成 30 年度活動報告書について
- ・令和元年度 FD 事業計画について
- ・（春期）授業公開・授業参観について
- ・平成 31 年度採用教員に対する研修及び学園紹介について
- ・各機関等の FD 活動について

議題 2（連絡事項）

- ・国士舘大学第 21 回 FD シンポジウムについて
- ・第 9 回新任教員研修セミナーについて

議題 3（審議事項）

- ・国士舘大学第 8 回 FD 研修会について
- ・（秋期）授業公開・授業参観について

議題 4 各ワーキンググループの活動について

議題 5 その他

第 3 回（令和元年 9 月 28 日）

議題 1（報告事項）

- ・国士舘大学第 21 回 FD シンポジウムについて

- ・第9回新任教員研修セミナーについて
- ・各機関のFD活動について

#### 議題2（連絡事項）

- ・ファカルティ・ディベロッパー養成講座について
- ・平成31年度採用教員に対するフォローアップ研修について
- ・秋期授業公開・授業参観について
- ・国士舘大学第8回FD研修会について

#### 議題3 各ワーキンググループの活動について

#### 議題4 その他

### 第4回（令和元年11月30日）

#### 議題1（報告事項）

- ・秋期授業公開・授業参観について
- ・平成31年度採用教員に対するフォローアップ研修について
- ・各機関のFD活動について

#### 議題2（連絡事項）

- ・ファカルティ・ディベロッパー養成講座について
- ・国士舘大学第8回FD研修会について

#### 議題3（審議事項）

- ・国士舘大学第22回FDシンポジウムについて
- ・国士舘大学第10号FDニュースレターについて
- ・令和2年度機関別FD計画について

#### 議題4 各ワーキンググループの活動について

#### 議題5 その他

### 第5回（令和2年1月25日）

#### 議題1（報告事項）

- ・国士舘大学第8回FD研修会について
- ・各機関のFD活動について

#### 議題2（連絡事項）

- ・令和元年度FD活動報告・令和2年度FD活動計画について
- ・国士舘大学第22回FDシンポジウムについて
- ・国士舘大学第10号FDニュースレターについて
- ・FD委員の選出について

#### 議題3（審議事項）

- ・令和2年度ワーキンググループの活動について

- ・令和 2 年度（春期）授業公開・授業参観について
- ・令和 2 年度 FD 委員会等日程について

議題 4 各ワーキンググループの活動について

議題 5 その他

## 第 6 回（令和 2 年 3 月 14 日）

### 議題 1（報告事項）

- ・各機関の令和元年度活動報告・令和 2 年度活動計画について
- ・FD 委員の選出結果について
- ・ファカルティ・ディベロッパー養成講座について
- ・各機関の FD 活動について

### 議題 2（連絡事項）

- ・国士舘大学 第 22 回 FD シンポジウムについて
- ・国士舘大学 第 10 号 FD ニュースレターについて
- ・令和 2 年度 FD 委員会等日程について
- ・令和元年度活動報告書について
- ・令和 2 年度採用教員に対する研修及び学園紹介について

### 議題 3（審議事項）

- ・令和 2 年度（春期）授業公開・授業参観について
- ・国士舘大学 第 22 回 FD シンポジウムについて

議題 4 各ワーキンググループの活動について

議題 5 その他

## 2. FD シンポジウム・FD 研修会等の開催

### 第 21 回 FD シンポジウム

○日 時：令和元年 7 月 13 日（土） 13：00 ～ 16：40

○場 所：世田谷キャンパス 34 号館 B 棟 3 階 B301 教室

○テーマ：『キャリア教育の意義と効果

～より望ましい社会的・職業的自立支援のために～』

○講演

『東北福祉大学が考えるキャリア教育について

～就業力育成を目指した取り組み 2019～』

講師：関川 伸哉 氏

（東北福祉大学 総合福祉学部 社会福祉学科 教授・

キャリアセンター副センター長）

○出席者数： 82 人（内訳：教員 72 人、職員 10 人）

### 第 8 回 FD 研修会

○日 時：令和元年 11 月 30 日（土） 13：00 ～ 16：30

○場 所：世田谷キャンパス メイプルセンチュリーホール 5 階第 1 会議室

○講 演・ワーク

『ケースメソッド教授法入門』

講師：黒岩 健一郎 氏

（青山学院大学 国際マネジメント研究科国際マネジメント専攻 教授）

○出席者数： 67 人（内訳：教員 65 人、職員 2 人）

### 3. セミナー等への派遣

(1) 新任教員研修セミナー（大学セミナーハウス）

◇参加者：櫻井 博子（法学部 講師）

松崎 史周（文学部 准教授）

◇期 間：令和元年 9 月 2 日（月）～4 日（水）

(2) ルーブリック評価入門 WS

◇参加者：津野 和宏（理工学部 教授）

名越 篤史（理工学部 准教授）

◇日 時：令和元年 11 月 9 日（土）

(3) JPFF 懇談企画

◇参加者：和田 義浩（法学部 教授）

◇日 時：令和 2 年 1 月 15 日（水）

(4) ファカルティ・ディベロッパー養成講座

◇参加者：古坂 正人（政経学部 講師）

高橋 幸雄（理工学部 准教授）

宍倉 悠太（法学部 講師）

◇日 時：令和 2 年 2 月 7 日（金）～9 日（日）

#### 4. 授業公開・参観授業

##### 【春期】

| 実施日・時限           | 科目名                       | 学部・教員氏名           | 参観人数 |
|------------------|---------------------------|-------------------|------|
| 6月11日（火）<br>2限   | 水泳                        | 文学部 江川 陽介         | 5人   |
| 6月12日（水）<br>3限   | 異文化理解                     | 21世紀アジア学部<br>青柳 寛 | 3人   |
| 6月12日（水）<br>4限   | 体力測定評価実習Ⅰ                 | 体育学部 須藤 明治        | 1人   |
| 6月13日（木）<br>1～4限 | 救急処置実習A－Ⅱ                 | 体育学部 張替 喜世一       | 1人   |
| 6月13日（木）<br>2限   | 財務会計論                     | 経営学部 島崎 杉雄        | 4人   |
| 6月13日（木）<br>4限   | 統計学総論（基礎）                 | 政経学部 貫名 貴洋        | 2人   |
| 6月13日（木）<br>4限   | まちづくり概論                   | 理工学部 二井 昭佳        | 2人   |
| 6月17日（月）<br>3限   | 武道体力<br>トレーニング論・実習Ⅰ       | 体育学部 田中 力         | 2人   |
| 6月21日（金）<br>3限   | 体育方法学・実習<br>（体操（集団行動を含む）） | 体育学部 山田 小太郎       | 0人   |
| 6月24日（月）<br>3限   | 企業犯罪と法A                   | 法学部 岡部 雅人         | 2人   |

### 【秋期】

| 実施日・時限          | 科目名         | 学部・教員氏名            | 参観人数 |
|-----------------|-------------|--------------------|------|
| 10月17日（木）<br>2限 | スポーツ解剖学     | 理工学部 地神 裕史         | 2人   |
| 10月17日（木）<br>4限 | 東南アジア民族文化論  | 政経学部 鈴木 佑記         | 4人   |
| 10月23日（水）<br>1限 | 外国史 B       | 文学部 石野 裕子          | 8人   |
| 10月23日（水）<br>4限 | 史料学実習Ⅱ      | 文学部 夏目 琢史          | 2人   |
| 10月25日（金）<br>3限 | 小学校英語       | 体育学部 五十嵐 浩子        | 2人   |
| 10月25日（金）<br>3限 | グローバルビジネス論  | 経営学部 堀口 朋亨         | 7人   |
| 10月29日（火）<br>2限 | 21世紀アジア学入門Ⅰ | 21世紀アジア学部<br>濱田 英作 | 0人   |

### 5. FDer 会議

- 第1回（令和元年4月16日）
- 第2回（令和元年6月25日）
- 第3回（令和元年7月23日）
- 第4回（令和元年9月17日）
- 第5回（令和元年11月19日）
- 第6回（令和元年1月14日）
- 第7回（令和2年2月25日）
- 第8回（令和2年3月14日）



## FD 委員会活動報告

令和元年度

FD 委員会活動報告（機関別）

**※1. 組織自己評価**

エビデンスに基づく評価基準

- ◎ 取り組み中十分な成果が達成された
- 取り組み中成果が得られ始めた
- △ 取り組み中成果はまだ得られていない
- × 取り組みまで至らなかった

エビデンスを添付してください 例示：(会議議事録、成果資料、等)

## 【機関名】 政経学部

## 1. FD 組織

|     |                                  |
|-----|----------------------------------|
| 名 称 | 政経学部FD推進委員会                      |
| 構成員 | 学部長、教務主任、学生主任、各学科主任及び政経学部FD委員会委員 |

## 2. 活動報告

| 課題 1 | 3つのポリシーの周知と理解                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                             |
|------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 活動計画 | <p>現在、ホームページ等で公表している政経学部の3つのポリシーの運用、修正については、特に新規採用教員に向けて「3つのポリシーの策定及び運用に関するガイドライン（平成28年3月31日）」の内容を平成31年度の政経学部教授会教務主任報告のなかで周知する取り組みを行う。既に公表している3ポリシーについては、平成30年度と同様に、AO入試の口頭試問担当者打ち合わせ、オープンキャンパス担当者打ち合わせ等の場で、資料を用いて内容の確認を行い、共通理解を高めるよう取り組む。特に、31年度においては、5月の入試説明会の前に入試委員会を開催して、入学試験で活用することを前提とした3つのポリシーの解釈について共通理解を高めるよう取り組む。</p>                                                           |
| 活動報告 | <p>組織自己評価 ※1 ○</p> <p>ホームページ等で公表している3つのポリシーに直結する問題を令和2年度AO入学試験口頭試問として実際に出題した。また、オープンキャンパスの学部紹介、学科別個別相談においても、3つのポリシーに関する資料を配布し、説明を行った。</p> <p>AO入学試験の口頭試問の結果及び推薦選考入学試験の面接担当者から寄せられた意見から、本学部のアドミッション・ポリシーは受験生にかなり周知されている一方、ディプロマ・ポリシーについては、「見ていない」、「知らない」という受験生が未だ多いことが明らかになった。また、5月の入試説明会に先立つ4月定例教授会終了後に入試委員会を開催したが、主たる議題は指定校の選定であり、入学試験で活用することを前提とした3つのポリシーの解釈について共通理解を十分深めるには至らなかった。</p> |

| 課題 2      | 初年次教育                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                          |           |   |
|-----------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------|---|
| 活動計画      | <p>政経学部では、フレッシュマン・ゼミナールを1年次必修科目として設置し、初年次教育に組織的に取り組んでいる。平成31年度の初年次教育においては、前年度担当者から寄せられた改善要望を踏まえ、内容の充実・見直しを図る。平成30年度のフレッシュマン・ゼミナールでは、図書館ガイダンスやキャリアガイダンスといった合同授業によって担当教員のプログラムが分断されてしまったことが問題となった。平成31年度は、担当教員によるフレッシュマン・ゼミナール副読本を活用した教育プログラムの効果向上のため、図書館ガイダンスやキャリアガイダンス、自校史教育といった合同授業を前期の後半に行うことを計画する。さらに、授業に参加していることのみが合同授業の評価対象であり、それゆえに、授業に集中するインセンティブが弱かったという現状を踏まえ、平成31年度の合同授業ガイダンスでは、受講者に課題を与え、その結果を成績評価に反映させることを試みる。</p> |           |   |
| 活動報告      | <table border="1" data-bbox="284 808 1394 860"> <tr> <td data-bbox="284 808 564 860">組織自己評価 ※1</td><td data-bbox="564 808 1394 860">◎</td></tr> </table> <p>令和元年度フレッシュマン・ゼミナールにおいては、活動計画の通り、図書館ガイダンスやキャリアガイダンス、自校史教育といった合同授業を前期の後半に実施した。また、これらの合同授業に関しては、教育内容について事前に担当者と教務主任が打ち合わせを行い、受講者に課題を与え、その結果をゼミ担当教員に返却することを取り決めた。5月定例教授会では、教務主任からゼミ担当教員に対して合同授業への学生の引率と、合同授業中の教室における授業支援の依頼があり、その結果、従来よりも部局間連携が機能した初年次教育となった。</p>      | 組織自己評価 ※1 | ◎ |
| 組織自己評価 ※1 | ◎                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                              |           |   |

| 課題 3 | 授業方法の改善（アクティブ・ラーニングの導入及び推進等）                                                                                                                                                                                                                                                                                               |   |
|------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---|
| 活動計画 | <p>アクティブ・ラーニングを効果的に取り組むための工夫に関しては、引き続き、教授会終了後等の時間を活用して、実践例の紹介や意見交換を行っていく。</p> <p>初年次キャリア教育におけるアクティブ・ラーニングに関しては、教員による積極的な授業参観を教授会等を通じて依頼する。</p> <p>授業支援システム「manaba」の授業での活用を促進するため、政経学部では、平成31年度入学者全員に対して、「manaba」のログイン方法を示した資料を新入生ガイダンス期間中に配布する計画である。</p>                                                                   |   |
|      | 組織自己評価 ※1                                                                                                                                                                                                                                                                                                                  | ○ |
| 活動報告 | <p>5月定例教授会において、学長からの学部等におけるFD活動の実施依頼について学部長から報告があり、活動計画に基づき、本学部ではFD委員による教授会終了後のアクティブ・ラーニングの研修会実施を予定していたが、諸事情により、本報告書の提出時点では未だ実現していない。</p> <p>授業支援システム「manaba」の授業での活用を促進するため、政経学部では、今年度入学者全員に対して、「manaba」のログイン方法を示した資料を4月2日に開催された政経学部ガイダンス時に配布した。また、2月定例教授会では、教務主任から各教員に対し、次年度の特別課題研究期間における「manaba」の活用方法についての詳細な説明があった。</p> |   |
|      |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                            |   |

| 課題 4 | 履修指導や学修支援（中退予防対策など）                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                       |
|------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 活動計画 | <p>現時点では政経学部の入学前教育が入学後の効果的な指導に結びついていないことが課題となっている。そこで、業者が提供する e-ラーニングを導入し、そのノウハウを活用して受講者の学習観や学習動機に関するデータを収集し、学生のタイプに応じたサポートを含めた入学前教育を実施することを平成 31 年度の事業計画のひとつとする。これにより、入学当初から中退危険度の高い学生を把握することも可能となると考えられる。</p> <p>リメディアル教育に関しては、中退者抑制に結びつくリメディアル教育の実現を目指し、政経学部リメディアル教育検討委員会を立ち上げることを計画している。オフィスアワーの活用促進に関しては、学期中に行われる学年担任による修学指導のなかで学生の活用を促進できるよう、工夫する。</p> <p>平成 31 年度の新入生に対する履修指導については、学年担任だけでなくフレッシュマン・ゼミナール担当教員も個別相談対応を行うことを計画している。</p>                                                                                                                                                                                                                                              |
|      | <p>組織自己評価 ※1      ○</p> <p>政経学部が独自に行っている入学前教育の目的は、「入学前に身につけておくべきこと」として政経学部のアドミッション・ポリシーに明示されている課題を入学予定者全員が達成できるようサポートすることである。平成 31 年度入試において政経学部への入学を平成 30 年以内に認められた入学予定者計 334 名を政経学部の入学前教育対象者とし、彼らが実際に入学するまでの期間（具体的には、令和 2 年 3 月 9 日まで）を有効活用することによって、初年次から成績不振に陥ることをある程度防ぐことができると期待される。2 月 10 日に開催された四役会で配布された中間報告によると、「日本語表現法」事前テスト受講率 94.9%、未受験者数 17 名であった。</p> <p>リメディアル教育に関しては、中退者抑制に結びつくリメディアル教育の実現を目指し、政経学部執行部および 5 名の専任教員による政経学部リメディアル教育検討委員会を立ち上げ、経済学科では学科会議で進捗状況報告を、四役会では答申を既に行っている。近々、教授会においてもリメディアル教育検討委員会から活動結果報告を行う予定である。</p> <p>平成 31 年度の新入生に対する履修指導については、履修ガイダンス期間中、学年担任だけでなくフレッシュマン・ゼミナール担当教員の個別相談ブースも設置し、ガイダンスを受けても大学での履修をよく理解できなかった新生を個別にサポートすることで、一定の成果を挙げることができた。</p> |

| 課題 5 FD への学生の取り込み（TA、授業支援学生など） |                                                                                                                                                                                                                                                                             |
|--------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 活動計画                           | <p>政経学部では、TA・SAを必要とする教員に対し、平成30年度10月定例教授会において、平成31年度予算の申請を授業支援課に提出するよう連絡を行っている。この予算制約の下で積極的にTA・SAを活用する計画である。</p> <p>また、平成31年度においても、オープンキャンパスの政経学部個別相談ブースの相談員として学生アルバイトを活用し、それによって、学生が自分の所属する学科の特色を深く知り、教員と協働できる機会を設けることとする。</p>                                             |
| 活動報告                           | <p>組織自己評価 ※1 ○</p> <p>活動計画の通り、オープンキャンパスの政経学部個別相談ブースの相談員として、また、入学試験業務補助として学生アルバイトを活用し、それによって、学生が自分の所属する学科の特色を深く知り、教員と協働できる機会を設けることができた。教員・職員と協働できたことは、彼らにとってよい経験になったと考えられる。</p> <p>政経学部におけるTA・SAの活用については、概ね活動計画の通りであったが、予定外のこととして、令和元年度は、春期・秋期の定期試験に補助としてもTAを活用するようになった。</p> |

| 課題 6 学生の学修成果の把握 |                                                                                                                                                                                                                                                         |
|-----------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 活動計画            | <p>政経学部では、平成31年度の初年次教育の一環としてアセスメントテスト:GPS (Global Proficiency Skills program)を活用することを計画しているが、これは学生一人一人の「批判的思考力」「協働的思考力」「創造的思考力」といった思考力の他、姿勢・態度、経験を自己評価および客観的評価し、その結果を通じて新入生に大学で学ぶ際のアドバイスを提供するものである。平成31年度は、このような測定方法により4年間の学修成果の把握を組織的に行うことを計画している。</p> |
| 活動報告            | <p>組織自己評価 ※1 ○</p> <p>活動計画に沿って、初年次教育の効果を測るためのアセスメントテストを実施した。また、後期フレッシュマン・ゼミナールのキャリア教育の成果をみるため、学生一人ひとりのプレゼンテーションをゼミ担当教員が授業参観することが9月定例教授会終了後の情報交換会で提案され、各教室では実際に授業参観が行われ、プレゼンテーション大会の最後に、参観した教員から所見が述べられた。</p>                                            |

【機関名】 体育学部

1. FD 組織

|     |                                                                    |
|-----|--------------------------------------------------------------------|
| 名 称 | FD 委員会                                                             |
| 構成員 | 委員長 三小田美稲子 副委員長 井上善弘<br>松井慎一、森脇保彦、牧亮、池田延行、山口嘉和、右田重昭、<br>五十嵐浩子、目野由希 |

2. 活動報告

|      |                                                                                                                                                      |
|------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 課題 1 | 3 つのポリシーの周知と理解                                                                                                                                       |
| 活動計画 | <ul style="list-style-type: none"> <li>各学科の会議において、3 つのポリシーを教員相互に確認しあう機会を設定する。</li> <li>各教員が担当する授業科目のシラバス等において、3 つのポリシーとの関連を明確に示した内容を記載する。</li> </ul> |
| 活動報告 | 組織自己評価 ※1 ○<br>3 つのポリシーについては、『学生便覧』等において教員間に共有され、新年度のガイダンスにおいても学生への周知とともに教員にも意識付けがなされた。                                                              |

|      |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                   |
|------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 課題 2 | 初年次教育                                                                                                                                                                                                                                                                                                             |
| 活動計画 | <ul style="list-style-type: none"> <li>プレゼンテーションやディスカッションなどの口頭発表や 模擬授業の技法を身につけるためのプログラムを実施する。</li> <li>野外実習を通して、①学生生活や学習習慣などの自己管理・時間管理能力をつける②大学という場を理解する③大学の中に人間関係を構築する④受動的学習態度から能動的学習態度への転換を図る取り組みを行う。</li> <li>学生が未来の自分を予測できるように、野外教育実習では大学の先輩や卒業生を SA として参加させ、学生に明確な目標を持たせ、動機づけを行う。</li> </ul>                 |
| 活動報告 | 組織自己評価 ※1 ○<br><ul style="list-style-type: none"> <li>プレゼンテーションやディスカッション等の口頭発表や模擬授業の技法を身につけるためのプログラムを実施した。</li> <li>基礎ゼミナールや野外教育実習を通して、①学生生活や学習習慣などの自己管理・時間管理能力をつける②大学という場を理解する③大学の中で人間関係を構築する④受動的学習態度から能動的学習態度への転換を図る取り組みを行った。</li> <li>学生が未来の自分を予想できるように、野外教育実習では大学の先輩や卒業生を SA として参加させ、今後の目標を明確化させた。</li> </ul> |

| 課題 3      | 授業方法の改善（アクティブ・ラーニングの導入及び推進等）                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                               |           |   |
|-----------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------|---|
| 活動計画      | <ul style="list-style-type: none"> <li>・アクティブ・ラーニングの具体的な内容や方法についての情報交換、アクティブ・ラーニングの先駆的な取り組みの紹介など、教員同士の情報共有と意見交換の機会を設定する。</li> <li>・アクティブ・ラーニングを志向した授業科目を教員相互に参加・観察等を行い、アクティブ・ラーニングについての理解を深める。</li> <li>・授業支援システム「manaba」「respon」「授業支援ボックス」等の ICT の授業での活用を促進するため、学部内での研修会を実施する。</li> <li>・ICT を活用した実践の具体的な内容や方法について情報交換する。（こどもスポーツ教育学科）</li> </ul>                                                                         |           |   |
| 活動報告      | <table border="1" data-bbox="292 723 1394 763"> <tr> <td data-bbox="292 723 560 763">組織自己評価 ※1</td><td data-bbox="560 723 1394 763">◎</td></tr> </table> <ul style="list-style-type: none"> <li>・授業公開により、アクティブ・ラーニングを施行した授業科目を教員相互に参加・観察を行い、アクティブ・ラーニングについての理解を深めた。</li> <li>・授業支援システム「manaba」「respon」「授業支援ボックス」などの ICT の授業での活用を促進した。</li> <li>・ICT を活用するための環境整備を進め、ICT を用いた授業実践を行い、複数教科間で情報を交換した。（こどもスポーツ教育学科）</li> </ul> | 組織自己評価 ※1 | ◎ |
| 組織自己評価 ※1 | ◎                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                          |           |   |

| 課題 4 | 履修指導や学修支援（中退予防対策など）                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                   |
|------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 活動計画 | <ul style="list-style-type: none"> <li>・各学年の担任が当該学生の動向をできるだけ把握して、他の教員への情報提供の頻度を高めていく。</li> <li>・各教員のゼミ活動で個々の学生の学業成績、部活動等の動向をできるだけ細かく把握する。また、課題の見つかった学生への早めの対応を検討する。</li> <li>・各教員のゼミ生の動向を他の教員に伝える機会を設定し、学生の情報の共有を図る。</li> <li>・各種野外活動や学外合宿研修会などの宿泊を伴う機会における学生の動向に気をつけて、課題の見つかった学生への対応を相互に図る。</li> <li>・3年から4年次には、約10人の学生に対して、1人の常勤教員が小担任として受け持つ。小担任は、担当学生の成績や出席状況を常に把握して、不良を認めた場合は速やかに面接指導をする。（スポーツ医科学科）</li> <li>・学習力調査問題試験（ベネッセコーポレーション）を4月オリエンテーション期に実施し、成績不良者の情報を共有し、対策（昼休みに理数系科目の勉強会）を実施する（スポーツ医科学科）。</li> <li>・体育学部独自に総合教育科目に理数系科目を配置し、学力向上を実施する（スポーツ医科学科）。</li> </ul>                                                                                                                                          |
|      | <div data-bbox="292 1061 557 1099">組織自己評価 ※1</div> <div data-bbox="564 1061 600 1093">◎</div> <ul style="list-style-type: none"> <li>・欠席の多い学生に対して、教職員間で情報を共有し、面接をするなどの対応を行った。</li> <li>・各学年の担任が当該学生の動向をできるだけ把握して、他の教員への情報提供の頻度を高めた。</li> <li>・各教員のゼミ活動で個々の学生の学業成績、部活動などの動向をできるだけ細かく把握する。また、課題の見つかった学生への早めの対応を検討した。</li> <li>・各教員のゼミ生の動向を他の教員に伝える機会を設定し、学生の情報の交換を図った。</li> <li>・各種野外活動や学外合宿研修会などの宿泊を伴う機会における学生の動向に気を付けて、課題の見つかった学生への対応を相互に図った。</li> <li>・3年から4年時には、約10人の学生に対して、一人の常勤教員が小担任として受け持つ。小担任は担当学生の成績や出席状況を常に把握して、不良を認めた場合は速やかに面接指導をした。</li> <li>・学習力調査問題試験（ベネッセコーポレーション）を4月オリエンテーション期に実施し、成績不良者の情報を共有し、昼休みに理数系科目の勉強会を行うなどの対策を講じた。（スポーツ医科学科）</li> <li>・体育学部独自に総合教育科目に理数系科目を配置し、学力向上を目指した。（スポーツ医科学科）</li> </ul> |

| 課題 5 FD への学生の取り込み（TA、授業支援学生など） |                                                                                                                                                                |
|--------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 活動計画                           | <ul style="list-style-type: none"> <li>・本学部を卒業した大学院生を授業科目の TA として活用する。</li> <li>・東京都教員養成塾生や各地域の教員採用試験合格者などを SA として学部生の授業科目のサポート・携わらせる（こどもスポーツ教育学科）。</li> </ul> |
| 活動報告                           | 組織自己評価 ※1 ○                                                                                                                                                    |
|                                | <ul style="list-style-type: none"> <li>・本学部を卒業した大学院生を授業科目の TA として活用した。</li> <li>・東京都教員養成塾生や各地域の教員採用試験合格者などを SA として学部生の授業科目のサポートに携わらせた（こどもスポーツ教育学科）</li> </ul>  |

| 課題 6 学生の学修成果の把握 |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                        |
|-----------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 活動計画            | <ul style="list-style-type: none"> <li>・教員採用試験の基礎的な条件として有効である、英検、数学検定、漢字検定などの制度に学生を積極的にチャレンジさせる。</li> <li>・各スポーツ競技での資格試験（柔道・剣道等での段位取得、スキーの技術検定、陸上競技の審判員、各種球技種目での審判員など）に学生を積極的にチャレンジさせる。</li> <li>・卒業研究Ⅰ・卒業研究Ⅱにおいて、救急救命士の国家試験の過去問または類似問題を複数回の模擬試験で行う。4 年の卒業研究Ⅱの中で、全国救急救命士養成施設による国家試験統一模擬試験を受験させて、全国的レベルでの実力を測る（スポーツ医科学科）。</li> </ul>    |
| 活動報告            | 組織自己評価 ※1 ◎                                                                                                                                                                                                                                                                                                                            |
|                 | <ul style="list-style-type: none"> <li>・教員採用試験の基礎的な条件として有効である、英検、数学検定、漢字検定などの制度に学生を積極的にチャレンジさせた。</li> <li>・各スポーツ競技での資格試験（柔道・剣道での段位取得、スキーの技術検定、陸上競技の審判員、各種球技種目での審判員など）に学部生を積極的にチャレンジさせた。</li> <li>・卒業研究Ⅰ・卒業研究Ⅱにおいて、救急救命士の国家試験の過去問または類似問題を複数回の模擬試験で行った。4 年の卒業研究Ⅱの中で、全国救急救命士養成施設による国家試験統一模擬試験を受験させて、全国的レベルでの実力を想定した。（スポーツ医科学科）</li> </ul> |

## 【機関名】 理工学部

## 1. FD 組織

|     |                                                                                       |
|-----|---------------------------------------------------------------------------------------|
| 名 称 | 理工学部 FD 委員会                                                                           |
| 構成員 | 二川学部長、大屋隆生教務主任、原英嗣学生主任、本田康裕委員（機械）、高橋幸雄委員（電子）、横内基委員（建築）、西村亮彦（まち）、土居博和委員（健康）、名越篤史委員（基礎） |

## 2. 活動報告

|      |                                                                                                                                                      |
|------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 課題 1 | 3 つのポリシーの周知と理解                                                                                                                                       |
| 活動計画 | <ul style="list-style-type: none"> <li>■ フレッシュマンセミナーや履修ガイダンス時に、3 つのポリシーについて配布・説明し、学生への周知をおこなう</li> <li>■ カリキュラムマップを通して、3 つのポリシーとの整合性を確認する</li> </ul> |
| 活動報告 | 組織自己評価 ※1    ◎<br>全ての学系において、フレッシュマンセミナーや履修ガイダンス時に、3 つのポリシーについて説明を実施した。また、カリキュラムマップを通して、DP、CP との整合性をチェックした。                                           |

|      |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                            |
|------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 課題 2 | 初年次教育                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                      |
| 活動計画 | <ul style="list-style-type: none"> <li>■ オリエンテーション：学年担任あるいはフレキシブル担当教員を中心に、入学時学生を対象に初年度教育としての学系ガイダンス及びオリエンテーションを行う。</li> <li>■ フレッシュマンセミナー時に、カリキュラムマップを配布・説明し、学生への周知をおこなう</li> <li>■ 理工学基礎演習科目群（1～2 単位）：各学系の特徴が反映された理工学基礎科目群を通じて、アカデミックアドバイザー制度を生かした初年次教育を実施する。</li> <li>■ キャリアデザイン A（2 単位）：大学 1 年次の自己の位置確認、スタディスキルの完成、ポジティブな意識の育成、高学年次を見据えた段階的かつ一貫したキャリア指導を行う。</li> <li>■ ものづくり基礎 A・B（各 1 単位）</li> <li>■ 新入生バスハイクを行い、学生間および学生-教員間のコミュニケーションを図る。</li> </ul> |
| 活動報告 | 組織自己評価 ※1    ◎<br>新入生ガイダンスを入学式翌日より実施。学系別プログラム、フレキシブル対応、学系別バスハイクを実施。学系ごとに基礎演習を実施。「キャリアデザイン A」によりキャリア教育の実施。                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                  |

| 課題3 授業方法の改善（アクティブ・ラーニングの導入及び推進等） |                                                                                                                                                        |
|----------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 活動計画                             | <ul style="list-style-type: none"> <li>■ アクティブ・ラーニングを取り入れた授業科目を増やすために、理工学部の科目における取組内容を把握し、教員間での共有を図る</li> <li>■ 授業支援システムを活用した科目を増やすよう働きかける。</li> </ul> |
| 活動報告                             | 組織自己評価 ※1 ○                                                                                                                                            |
|                                  | 公開授業を実施した。                                                                                                                                             |

| 課題4 履修指導や学修支援（中退予防対策など） |                                                                                                                                                                                                                                                        |
|-------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 活動計画                    | <ul style="list-style-type: none"> <li>■ オフィス・アワーの周知を図る</li> <li>■ 出席システムを活用した複数科目の連続欠席者の氏名を、自動的に学年担任に知らせるアラートシステム構築の要望をおこなう</li> <li>■ 専任教員が学生のアカデミックアドバイザーとなり、8～10名の学生を担当。学生に対してきめ細かい教育指導を行うとともに、理工学基礎科目群においてアカデミックアドバイザー制度活用しての少人数指導を行う。</li> </ul> |
| 活動報告                    | 組織自己評価 ※1 ○                                                                                                                                                                                                                                            |
|                         | <p>各教員のオフィス・アワーを一覧にまとめ周知した。</p> <p>出席システムを活用した複数科目の連続欠席者の氏名を、自動的に学年担任に知らせるアラートシステム構築の要望には至らなかった。</p> <p>アカデミックアドバイザー制度を活用した履修指導・学修支援を行った。</p>                                                                                                          |

| 課題5 FD への学生の取り込み（TA、授業支援学生など） |                                                                                                         |
|-------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 活動計画                          | <ul style="list-style-type: none"> <li>■ TA・SA を積極的に活用する</li> <li>■ TA・SA の意見も取り入れた授業改善に取り組む</li> </ul> |
| 活動報告                          | 組織自己評価 ※1 ○                                                                                             |
|                               | 演習系の科目においても TA・SA を積極的に活用し、理解進度の遅い学生へのフォローを実施した。個別授業ごとに、TA・SA の意見を参考にしているが、集約には至らなかった。                  |

|      |                                                                                                                                                             |   |
|------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---|
| 課題 6 | 学生の学修成果の把握                                                                                                                                                  |   |
| 活動計画 | <ul style="list-style-type: none"> <li>■ 継続して、理工学部全体で 1・2 年次にアセスメント・テストを実施し、学生の学修成果の把握を図る</li> <li>■ 継続して、技術者としての倫理観構築のために、学部必修科目として「技術者倫理」を実施する</li> </ul> |   |
| 活動報告 | 組織自己評価 ※1                                                                                                                                                   | ◎ |
|      | 過年度に引き続き、アセスメント・テストおよび「技術者倫理」を実施した。                                                                                                                         |   |

## 【機関名】 法学部

## 1. FD 組織

|     |                                         |
|-----|-----------------------------------------|
| 名 称 | 法学部 FD 運営委員会                            |
| 構成員 | 飯塚 真（委員長）、宍倉悠太、西本靖宏、鈴木裕之、中村達也、渡邊昭成、和田義浩 |

## 2. 活動報告

| 課題 1 | 3 つのポリシーの周知と理解                                                                                                                                                                                                                                                                                                       |
|------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 活動計画 | <p>3 つのポリシーの周知と理解について、次の 4 つを実践する予定である。</p> <p>①昨年度に続き、ガイドラインを教授会や各種委員会等で取り上げ、教員間に 3 つのポリシーのガイドラインを周知徹底する。</p> <p>②3 つのポリシーを教員間で共有し、それらを基礎として「卒業の認定に関する方針」「教育課程の編成及び実施に関する方針」「入学者の受け入れに関する方針」を決定する。</p> <p>③昨年度に続き、3 つのポリシーを基礎として、それに沿った明確かつ具体的な学部およびカリキュラム改革案の策定をより一層推進する。</p> <p>④以上に基づき、新カリキュラムに基づく授業を実施していく。</p> |
| 活動報告 | <p>組織自己評価 ※1</p> <p>○取り組み中成果が得られ始めた。</p> <p>令和元年度から新カリキュラムに基づく授業が開始され、3 ポリシーに基づく教育の実践が行われた。</p>                                                                                                                                                                                                                      |

| 課題 2 | 初年次教育                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                         |
|------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 活動計画 | <p>初年次教育として、次の 3 点を実施する予定である。</p> <p>①本年度も例年通り、両学科とも実質通年（前期 A、後期 B）で初年次ゼミ（「教養教育ゼミ」）を専門必修科目として開講する。春期には「図書館ガイダンス」を含む各種の導入教育を行う。その一部を外部業者（＝㈱ベネッセコーポレーション）に委託し、「教養教育ゼミ」では、「クリティカルシンキング講座（3 回）」「文章レポートの書き方講座」（2 回）をそれぞれ実施する。それらに基づく学修内容を教員もフォローアップしていく。また秋期には、キャリアアプローチを受験させ、それに基づきベネッセによるキャリア教育に関する講座を実施し、教員が担当する形でグループワーク・プレゼンテーションを実施する。これらを通じて、次年度以降の修学への橋渡しも視野に、指導を進めていくとともに、入学後の早い段階から 4 年後の進路を見据えた教育を実施していく。</p> <p>②また、新入生を対象とした各種「施設見学会」（バスツアー）を企画する。東京と横浜、埼玉にある司法、公安、行政関連の施設へのバスツアー（年 2、3 回）への参加を募集する。法学研究の意味と法律の社会的機能について「体験的」に意識化する重要な機会となることを期待している。</p> <p>④学習障害を抱えている学生に対しては、保護者や校内のカウンセラーと連携し、可能な限り合理的な配慮を行うほか、今後のためによりよい配慮の在り方について検討する。可能であれば他学部等と対応状況を共有する。</p> |
|      | <p>組織自己評価 ※1</p> <p>○取り組み中成果が得られ始めた。</p> <p>新カリキュラムに基づく初年次教育が実施され、「教養教育ゼミ」では計画通りの講座が実施された。また、バスツアーも昨年同様に企画及び実施をし、例年よりも多くの希望者が集まった。さらに、「法学 A・B」「キャリアデザイン I・II・III」「法学特殊講座 I・II・III」のほか、「民法 A・B」「刑法 A・B」などもオムニバス形式で実施をする初めての取り組みが行われた。また「教養教育ゼミ」「刑法 A・B」では、実務講話も実施し、昨年度以上に充実した初年次教育を実施することができた。</p> <p>他方、委託講座に関しては、ゼミにおいて学生と教員の交流をもっと図ることも視野に、その実施回数や実施成果については今後検討を進めていく予定である。</p>                                                                                                                                                                                                                                                                                             |

| 課題 3 | 授業方法の改善（アクティブ・ラーニングの導入及び推進等）                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                    |
|------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 活動計画 | <p>昨年同様、授業方法の改善に関しては、以下の 3 点を実践する予定である。</p> <p>①教員間でアクティブ・ラーニングの意義や方法を確認し合う機会を設ける。とりわけ、法学教育の性質、授業形態や受講者数など、様々な要素を勘案し、各授業に相応しい形で取り入れられるよう教員同士で議論する機会を設ける必要がある。</p> <p>②学部内でアクティブ・ラーニングの講演会や講習会等を案内し、参加を促す。</p> <p>③FD 委員会と協力し、学部内におけるアクティブ・ラーニングの実施状況を把握する。</p>                                                                                                                  |
| 活動報告 | <p>組織自己評価 ※1</p> <p>○取り組み中成果が得られ始めた</p> <p>昨年と同じく、法学部において AL 推進の一環として公開授業（企業犯罪と法 A・担当：岡部雅人教授）を 6 月 24 日に実施し、教員に参観してもらう機会を提供した。また、昨年に倣い教授会において第 21 回 FD シンポジウム・第 8 回 FD 研修会への参加も呼びかけ（第 4 回教授会議事録参照）、シンポジウムに 12 名、FD 研修会に 13 名が参加した。</p> <p>また、FD 委員会においても、学内 FD 活動の実施状況を報告した（第 3 回 FD 委員会議事録参照）。また、宍倉悠太講師がファカルティ・ディベロッパー養成講座（2020 年 2 月 7 日（金）～9 日（日）、於：芝浦工業大学芝浦キャンパス）に参加した。</p> |

| 課題 4 | 履修指導や学修支援（中退予防対策など）                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                |
|------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 活動計画 | <p>I. 入学前教育について、AO 入試・各種推薦入試による入学予定者に対し、以下の 2 つの取組を実施する予定である。</p> <p>①入学前教育については、(ア)「法律に関心を持つこと」を主な達成目標にして、補完的に(イ)「高校の求める学習を理解すること」も含めて実施する。</p> <p>②(ア)について、manaba を利用して、法学部行事の動画（主催講演会や模擬裁判）を視聴させる。そのうえで、これらを土台に、自分で調べて報告するタイプのレポートを 2 回作成・提出させる。</p> <p>③(イ)について、上記②のレポートを作成する準備として、外部業者（＝WAO）に委託する形で、「日本語表現法」講座を実施する。また、希望者に対して「小論文」「英語ステップアップ学習」の受講も可能とさせる。</p> <p>④希望者に対して、4 年生の卒業論文発表会に参加させるとともに、専任教員によるスクーリングも合わせて実施する。さらに、国士館を知ってもらうため、大講堂・国士館史資料館を含むキャンパスツアーも行う。</p> <p>⑤全学に導入された manabafolio の機能を活用し、全入学予定者に向けて逐次各種の情報発信を行う。学生に対して manaba の活用を周知徹底する。</p> <p>II. リメディアル教育については、とりわけ以下の 5 点が挙げられる。</p> <p>①教養教育ゼミにおいて各種導入教育を実施、特に業務委託による「クリティカルシンキング」「論文・レポートの書き方」講座を開講し、人との接し方やマナー、論理的に文章を書く力等を涵養し、法学教育にとって不可欠な素養を修得させる。</p> <p>②「キャリア形成」科目の内容として開講されている新聞の「スクラップ講座」を通じ、新聞購読への意識と社会的関心全般の醸成を図ると同時に、情報処理の重要性と方策について考える重要な機会を提供する。</p> <p>③出席回数が少ない学生に関しては、学習の遅れを取り戻すとともに、中退防止対策の一環として、個別面談や補習教育を行うなど、救済措置を実施する。とりわけ、個別に専門的な対応を必要とする学生については、学年担任のみならず、学生相談室等の学内資源を活用するほか、新たな対応の仕組みを検討する。</p> <p>④全学的な取り組みを前提として、GPA を活用し、成績不良者を選定したうえで面談し、学習の立て直しを図る。</p> |

|      |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                  |  |
|------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--|
| 活動報告 | 組織自己評価 ※1                                                                                                                                                                                                                                                                                                                        |  |
|      | <p>○取り組み中成果が得られ始めた。</p> <p>例年通り入学前教育を実施し、新入生ウォークラリーによる国士館史の教育も行った（※4年生の卒業論文発表会は中止）。さらに、ガイダンスや manaba により、オフィス・アワーの利用を学生に周知したほか、manaba の活用方法を提示した。他方、出席不良学生や成績不良学生などに対する中退予防対策として、学年担任を中心に定期的に当該学生や保護者等と面談を行ったが、例年同様に教員では対応の限界があるとの課題が提示された。なおこの点については、FD 委員会の第3WG において検討課題としている。今後さらに全学的にその迅速・的確な対応の在り方を検討し、早急に提示していくべきと考える。</p> |  |

|      |                                                                                                                                                  |  |
|------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--|
| 課題5  | FD への学生の取り組み（TA、授業支援学生など）                                                                                                                        |  |
| 活動計画 | <p>以下2点に留意して、さらなる制度の実践に取り組む。</p> <p>①学生または教員に対して TA・SA 制度を周知する。</p> <p>②学生数の多い授業や専門機器を使う授業その他必要がある場合、TA・SA の積極的な活用を促す。</p>                       |  |
| 活動報告 | 組織自己評価 ※1                                                                                                                                        |  |
|      | <p>○取り組み中成果が得られ始めた</p> <p>令和元年度は TA7 名（春秋学期 7 科目）の採用であったが、SA の採用はなかった。昨年より若干採用数が増えたものの、まだまだ周知及び活動が進んでいない状況にあり、今後さらなる TA・SA 制度を周知する必要があると考える。</p> |  |

| 課題 6 | 学生の学修成果の把握 |                                                                                                                                                                                                                                       |
|------|------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 活動計画 |            | <p>昨年同様、次の 4 点に基づき学修成果の把握に努めたい。</p> <p>①学部全体で法学検定試験の取得を推奨し、単位化を実施・拡充する。</p> <p>②行政書士や宅建士など各種の資格試験の単位化を実施・拡充する。</p> <p>③昨年度に引き続き、法学検定試験を大学で団体受験し、そこから得られた成果を分析・検討する。</p> <p>④語学の授業に関して、従来通り、テストによるクラス分けを行い、各学生にとって相応しいレベルの講義を実施する。</p> |
|      |            | <p>組織自己評価 ※1</p> <p>◎取り組み中十分な成果が達成された</p> <p>今年度も法学検定試験の取得を学生にすすめ、受験生は 165 名、うちスタンダード＜中級＞コースの合格者 24 名を、ベーシック＜基礎＞コースの合格者 80 名を輩出した。</p> <p>語学については例年通り年度初めに新入生に対しプレースメントテストを実施してクラス分けを行い、各レベルに沿った講義を実施した。</p>                          |

【機関名】 文学部

1. FD 組織

|     |                                               |
|-----|-----------------------------------------------|
| 名 称 | 文学部 FD 委員会                                    |
| 構成員 | 小川快之・佐々木明彦・久保田裕次・村田裕司・野津 悌・藤森 馨・<br>河野 寛・桜井美加 |

2. 活動報告

| 課題 1 |                                                                                                                                         | 3 つのポリシーの周知と理解 |
|------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------|
| 活動計画 | 学部および学科単位で策定された 3 つのポリシーについて、オープンキャンパスやホームページ等で周知した。                                                                                    |                |
|      | <input type="checkbox"/> 3 つのポリシーの策定及び運用に関するガイドラインの内容を学部内で周知する取組を行う。<br><input type="checkbox"/> 策定した 3 つのポリシーについて学部内での共通理解を高める取組を行う。   |                |
| 活動報告 | 組織自己評価※1                                                                                                                                | ○              |
|      | 学部および学科単位で策定された 3 つのポリシーについて、オープンキャンパスやホームページ等で周知した。                                                                                    |                |
|      | <input type="checkbox"/> 3 つのポリシーの策定及び運用に関するガイドラインの内容を学部内で周知する取組を行った。<br><input type="checkbox"/> 策定した 3 つのポリシーについて学部内での共通理解を高める取組を行った。 |                |

| 課題 2     | 初年次教育                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                   |          |   |
|----------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------|---|
| 活動計画     | <p>初年次教育に組織的に取り組む。</p> <p><input type="checkbox"/> 初年次教育の内容の充実・見直しを図る。(以下の項目を参照)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● レポート・論文の書き方等の文章作法を身につけるためのプログラム</li> <li>● ノートの取り方に関するプログラム</li> <li>● プレゼンテーションやディスカッション等の口頭発表の技法を身につけるためのプログラム</li> <li>● 学問や大学教育全般に対する動機づけのためのプログラム</li> <li>● 論理的思考や問題発見・解決能力の向上のためのプログラム</li> <li>● 将来の職業生活や進路選択に対する動機づけ・方向づけのためのプログラム</li> <li>● 社会の構成員としての自覚・責任感・倫理観育成のためのプログラム</li> <li>● メンタルヘルス等、精神的・肉体的健康の保持に関するプログラム</li> <li>● 学生生活における時間管理や学修習慣を身につけるためのプログラム</li> <li>● 大学内の教育資源（図書館を含む）の活用方法を身につけるためのプログラム</li> </ul> <p><input type="checkbox"/> 自大学の歴史等を題材とした、自大学への帰属意識の向上に関するプログラム</p>                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                 |          |   |
| 活動報告     | <table border="1" data-bbox="293 913 555 958"> <tr> <td data-bbox="293 913 555 958">組織自己評価※1</td> <td data-bbox="555 913 1394 958">◎</td> </tr> </table> <p>初年次教育に組織的に取り組み、初年次教育の内容の充実・見直しを図るため、文学部教育学学科では、今年度から教育学コースと初等教育コースの合同授業を始めた。その内容は以下の通りである。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● レポート・論文の書き方等の文章作法を身につけるためのプログラムを実施した。提出された課題レポートを添削し、当該学生の文章校正力の気づきを促した。</li> <li>● ノートの取り方に関するプログラムを実施することで、効率よく大学での学習を進め、単位履修がスムーズになるように努めた。</li> <li>● プレゼンテーションやディスカッション等の口頭発表の技法を身につけさせた。</li> <li>● 学問や大学教育全般に対する動機づけのためのプログラムを実施した。</li> <li>● 論理的思考や問題発見・解決能力の向上のためのプログラムをアクティブラーニングなどを通じて実施した。</li> <li>● 将来の職業生活や進路選択に対する動機づけ・方向づけのためのプログラムは、教育学科なので、主に大学近隣の小学校へ見学することで、学校現場に触れる機会を設けた。また見学レポートを書かせることで、将来の自分の教師像などについて洞察を深める機会を与えた。</li> <li>● 社会の構成員としての自覚・責任感・倫理観育成のためのプログラムは、学外からマナー講座の講師を招き、学生の社会人としての作法を学ばせた。</li> <li>● メンタルヘルス等、精神的・肉体的健康の保持に関するプログラムについては、主に1年生担任教員による個人面談を通して実施した。</li> <li>● 学生生活における時間管理や学修習慣を身につけるためのプログラムは講義中に担当教員より説明している。</li> <li>● 大学内の教育資源（図書館を含む）の活用方法を身につけるためのプログラムを実施した。</li> </ul> | 組織自己評価※1 | ◎ |
| 組織自己評価※1 | ◎                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                       |          |   |

| 課題 3     | 授業方法の改善（アクティブ・ラーニングの導入及び推進等）                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                            |          |   |
|----------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------|---|
| 活動計画     | <p>個々の教員によるアクティブ・ラーニングの実践事例をミニワークショップや報告会等により学部内で共有する。</p> <p><input type="checkbox"/> 学部内で関連する学問分野におけるアクティブ・ラーニングの事例紹介や外部講師による講習会を行う。</p> <p><input type="checkbox"/> 授業支援システム「manaba」「respon」「授業支援ボックス」等の ICT の授業での活用を促進する。</p> <p><input type="checkbox"/> 学部内で授業公開・授業参観を行う。</p> <p><input type="checkbox"/> 全学的な授業公開・授業参観に積極的に参加する。</p>                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                             |          |   |
| 活動報告     | <table border="1" data-bbox="293 622 558 667"> <tr> <td>組織自己評価※1</td><td>◎</td></tr> </table> <p><input type="checkbox"/> 学部教員対象の防災勉強会を開催した。防災拠点大学を標榜する本学において、「地域社会との共生」「高い社会貢献意識」の達成を目指すうえで、人文科学の知見は欠くべからざるものである。そこで人文科学の立場から災害、防災を捉え返し、それぞれの専門領域の知見の一般化と汎用化を目的とし、勉強会を企画、催行した。併せてアクティブラーニングの手法を学ぶ機会も得た。</p> <p><input type="checkbox"/> 学部内で授業公開・授業参観を行うにあたり、教授会等で FD 委員より周知した。</p> <p>6 月 11 日（火）2 限, MCH プール</p> <p>担当教員：江川陽介 先生 科目：水泳</p> <p>10 月 23 日(水) 1 限, 6304 教室</p> <p>担当教員：石野裕子 先生 科目：外国史 B</p> <p>4 限, 史料学実習室（34 号館 7 階）</p> <p>担当教員：夏目琢史先生 科目：史料学実習Ⅱ</p> <p><input type="checkbox"/> カリキュラム委員会を中心にして、新カリキュラムのための新たなカリキュラムマップを作成した。</p> <p>ミニ FD 実施テーマ：第 19 回地理ワークショップへの参加と講義法についての反省・討議</p> <p>実施日： 1) 2019 年 7 月 27 日（土）9:50～17:40</p> <p>2) 2019 年 8 月 2 日（金）10:00～10:15（別会議の冒頭）</p> <p>FD 実施内容：</p> <p>1)大学の研究成果や教育の成果を社会・教育界へ還元するという主旨で、主として中・高の先生方を対象に、地理学教室主催で開催している地理ワークショップ（第 19 回のテーマは「ホビーと『地理』：生徒を飽きさせない地理」）に地理・環境コース教員全員が参加した。</p> <p>教員全員でワークショップの適切で効果的な運営を行ったほか、講義担当者（内田順文、磯谷達宏）や外部講師（井上明日香教諭：神奈川県立川崎高等学校）の講義を聴き、知識の習得をはかるとともに教育の質の向上について全体討論を行った。</p> <p>2)ワークショップ当日に討論した内容を題材として、講義法や発声法などについて討議し、各人の講義での注意点などを再確認した。</p> | 組織自己評価※1 | ◎ |
| 組織自己評価※1 | ◎                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                       |          |   |

|      |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                         |
|------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 活動報告 | <p>□東洋史学コース 2019 年度ミニ FD 活動内容</p> <p>【卒業論文ハンドブックの作成と活用】</p> <p>東洋史学コースの学生の卒業論文に対する意識を高め、作業の効率化と論文内容の質の向上を図るために FD 委員が『東洋史学コース・卒業論文ハンドブック』を作成し、大学のドキュメントセンターを活用して製本印刷して、コースの全学生とゼミの担当教員に配布した。同ハンドブックは、研究書・論文の探し方、研究作業の進め方、卒業論文の書き方などを解説し、論文書式の具体例も提示した内容となっている。活用法としては、研究情報の収集能力、先行研究の検討力、関連史料の読解力など基礎的な研究能力の育成を行い、さらに発表と意見交換を通じた表現力・探求力の育成を図った。</p> <p>また、3 年次対象の東洋史演習 1、及び 4 年次対象の東洋史演習 2 では、各ゼミの担当教員が、ハンドブックを活用して、卒業論文の指導を行った。年度末には、ハンドブックの教育的有効性を検証するために、学生にアンケートを行い、また、ゼミ担当教員同士で意見交換も行い、改善点が発見された場合は、改訂版を作成した。</p> <p>【授業研究の成果を踏まえた学外研修の実施】</p> <p>今年度は、「東洋文庫と中国風の史跡をめぐる旅——東洋文庫・旧芝離宮恩賜庭園」を実施した。</p> |
|------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|

| 課題 4 | 履修指導や学修支援（中退予防対策など）                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                          |
|------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 活動計画 | <p>①入学前教育</p> <p><input type="checkbox"/> AO 入試や各種の推薦入試で合格し入学が決まった人に対し、入学後の学習のための準備として入学前教育を行う。</p> <p><input type="checkbox"/> 入学前教育の成績と入学後の成績を連動させた成績管理を行う。</p> <p>②リメディアル教育</p> <p><input type="checkbox"/> 大学教育を受ける前提となる基礎的な知識等についての教育（補習教育）を行う。</p> <p>③オフィスアワー等</p> <p><input type="checkbox"/> オフィス・アワーの活用を促進するための具体策を講じる。</p> <p><input type="checkbox"/> アドバイザー制度を設ける、また一層の活用を図る。</p> <p><input type="checkbox"/> 学修ポートフォリオを作成し、学生の指導に活用する。</p> <p><input type="checkbox"/> ラーニング・コモンズを活用する。</p>                                                                                                                                                                                    |
|      | <p>組織自己評価※1      ◎</p> <p>①入学前教育</p> <p><input type="checkbox"/> 大学での学修に対応できる文章表現力を養成するため、同一の教材で映像授業を受講して課題に取り組み、その中の二回分の小論文を添削指導して学生にフィードバックする。また、その成果を教員が共有し、入学後の指導に活かす。</p> <p><input type="checkbox"/> 入学前教育の一環として、3月末にウェルカムデーを開催する予定だった。文学部での学びと生活について、その内容をスライドなどを使って説明し、また入学予定者だけでなく保護者も招待することで、大学への理解も深めることを目的としたが、新型コロナウイルスの影響で本年度は中止とした。</p> <p>②オフィスアワー等</p> <p><input type="checkbox"/> オフィス・アワーの活用を促進するために、各教員の連絡先リストを学生に配布し、周知した。</p> <p><input type="checkbox"/> アドバイザー制度に似たようなシステムで担任制度を設け、各学年の担任が受け持っている学生の個人的な修学やメンタルヘルス、進路などの相談を受けた。</p> <p>③各ゼミ担当教員による履修指導や学習支援を実施した。</p> <p>④文学科日本文学・文化コースでは、4月のオリエンテーション期間中に新入生を対象とするアンケートを実施した。また3月の学位記授与式の際に卒業生を対象とするアンケートを実施した。</p> |

|      |                                                                                                                                                                                                                 |   |
|------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---|
| 課題 5 | FD への学生の取り込み（TA、授業支援学生など）                                                                                                                                                                                       |   |
| 活動計画 | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ TA を積極的に活用し、授業進行の効率化を図る。</li> <li>・ 留学生などをサポートするために、SA を積極的に活用する。</li> <li>・ 授業アンケートの結果や学生のニーズに対応した授業改善に取り組む。</li> </ul>                                               |   |
| 活動報告 | 組織自己評価※1                                                                                                                                                                                                        | ○ |
|      | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 大学院生に TA を依頼し、授業進行の効率化を図った。</li> <li>・ 留学生などをサポートするために、SA は活用しなかったが、一緒に履修する学生が仲間意識をもってサポートできるように、授業内外でそれを促進した。</li> <li>・ 授業アンケートの結果や学生のニーズに対応した授業改善に取り組んだ。</li> </ul> |   |

| 課題 6     | 学生の学修成果の把握                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                   |          |   |
|----------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------|---|
| 活動計画     | <p>ルーブリックの開発や資格試験、検定試験、アセスメント・テスト等客観的な測定方法により、学生の学修成果の把握を組織的に行う。</p> <p>(以下の項目を参照)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 知識・理解 (例：文化、社会、自然に関する知識の理解)</li> <li>● 汎用的能力 (例：コミュニケーションスキル、数量的スキル、問題解決能力)</li> <li>● 獲得した知識等を活用し、新たな課題に適用し課題を解決する能力</li> <li>● 態度・志向性 (例：自己管理能力、チームワーク)</li> <li>● 専門的な知識</li> <li>● 専門的な技術や技能</li> <li>● 専門職業人としての倫理観 など</li> </ul> <p><input type="checkbox"/> 学修ポートフォリオを作成し、学生の学修成果の把握を組織的に行う。</p>                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                      |          |   |
| 活動報告     | <table border="1" data-bbox="290 788 555 824"> <tr> <td>組織自己評価※1</td> <td>◎</td> </tr> </table> <p>ルーブリックの開発や資格試験、検定試験、アセスメント・テスト等客観的な測定方法により、学生の学修成果の把握を組織的に行った。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 知識・理解 (例：文化、社会、自然に関する知識の理解) が増えた。</li> <li>● 汎用的能力 (例：コミュニケーションスキル、数量的スキル、問題解決能力) が向上した。</li> <li>● 獲得した知識等を活用し、新たな課題に適用し課題を解決する能力が向上した。</li> <li>● 態度・志向性 (例：自己管理能力、チームワーク) が向上した。</li> <li>● 専門的な知識が増した。</li> <li>● 専門的な技術や技能が増した。</li> <li>● 専門職業人としての倫理観などが向上した。</li> </ul> <p>文学部では引き続き、卒業論文の客観的な測定方法を高めるために、ルーブリックの質問項目をよりわかりやすくシンプルにした (例えば、教育学コースでは大幅に内容の見直しをした)。そうすることで、履修生にもわかりやすい評価方法としてさらに改良されたと思われる。教育学コースのルーブリック項目 (改定版) を以下に示す。</p> <p>卒業論文成績評価ルーブリック (教育学コース)</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 文章表現上の基本的ルールが適切に守られているか。<br/>良い：10 点、やや良い：8 点、普通 6 点、やや悪い 4 点、悪い 2 点。</li> <li>2. 十分な量の文献・資料・データ等を活用しているか。</li> <li>3. 論旨が通った文章を書けているか。</li> <li>4. 各章・各節等が論理的に構成されているか。</li> <li>5. 研究課題が明確かつ具体的に示されているか。</li> <li>6. 研究課題に普遍性あるいは独創性があるか。</li> <li>7. 研究課題に適した研究方法がとられているか。</li> <li>8. 文献・資料・データ等の読み取りが正確であるか。</li> <li>9. 知的探究心や追求心が感じられるか。</li> <li>10. 十分な時間をかけて継続的に論文作成に取り組むことができたか。</li> </ol> <p>※「良い」から「悪い」までの具体的基準は、各ゼミで設定することとする。</p> | 組織自己評価※1 | ◎ |
| 組織自己評価※1 | ◎                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                            |          |   |

|      |                                                                                                                                                                                                                                                                                                      |
|------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 活動報告 | <p>○2019 年度に倫理学コースが行った FD 活動の事例：</p> <p>2019 年 6 月 15 日（土）14 時から 14 時半まで、倫理学コースの卒論指導を担当する 3 名で「倫理学コース卒論評価ルーブリック」の検討会を行い、現行ルーブリックの改善点についての意見交換を行った。評価ポイントが適切かつきめ細かに区別されている点が再確認され、大きな修正は今の時点では必要ないという結論になった。他方で、教員のみならず、学生の立場からももう少し評価ポイントがクリアになったほうがよいとの指摘もあり、現行のルーブリックに添付する形で簡単な説明書を作成することになった。</p> |
|------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|

## 【機関名】 21 世紀アジア学部

## 1. FD 組織

|     |                                 |
|-----|---------------------------------|
| 名 称 | FD 委員会                          |
| 構成員 | 濱田英作（学部内 FD 委員長）、カイル・ロデリック、竹村英二 |

## 2. 活動報告

| 課題 1 3 つのポリシーの周知と理解 |                                                                                                                                                                                                          |
|---------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 活動計画                | <p>□教授会場で、折に触れ、また繰り返し 3 つのポリシー策定及び運用ガイドラインの文書を配布し、また口頭でも説明することにより、教員の自覚の深化を図る。</p> <p>□入学定員減、新カリキュラム実施に対応・即応して、さらに学部内での議論を深化充実させ、3 つのポリシーの周知徹底を図る。</p> <p>□学部内教務委員会での議論が進むように、FD 委員会も連携して働きかけを続けていく。</p> |
| 活動報告                | <p>組織自己評価 ※1 ○</p> <p>学部新カリキュラムが旧カリキュラムと並行して動き出し、現在のところ順調に進んでいる。</p>                                                                                                                                     |

| 課題 2 初年次教育 |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                     |
|------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 活動計画       | <p>□初年次教育のみならず、2 年次に至るまでの「学士力ゲートウェイ」たる総合演習(少人数ゼミ)1～4 プログラムについて、学部内に設置されている学科教育委員会で検討し、共通教材原案作成に向けて、前年度に引き続き検討していく。その内容には、●学問や大学教育全般に対する動機づけのためのプログラム●レポート・論文の書き方等の文章作法を身につけるためのプログラム●ノートの取り方に関するプログラム●プレゼンテーションやディスカッション等の口頭発表の技法を身につけるためのプログラム●学生生活における時間管理や学修習慣を身につけるためのプログラム●大学内の教育資源（図書館を含む）の活用方法を身につけるためのプログラム●自大学の歴史等を題材とした、自大学への帰属意識の向上に関するプログラム等が含まれる。</p> <p>□アクティブ・ラーニングが実現しうるよう努力する。</p> |
| 活動報告       | <p>組織自己評価 ※1 ◎</p> <p>学部内学科教育運営委員会において詳細に検討を重ねた結果、総合演習(少人数ゼミ)1～2 の共通テキスト「アカデミック・スキル・テキスト」が完成し、その運用が始まった。</p>                                                                                                                                                                                                                                                                                        |

| 課題 3 授業方法の改善（アクティブ・ラーニングの導入及び推進等） |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                          |
|-----------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 活動計画                              | <input type="checkbox"/> アクティブ・ラーニングが数多く実現しうるように努力する。<br><input type="checkbox"/> 授業支援システム「manaba」等の ICT の授業での活用を促進するべく働きかける。<br><input type="checkbox"/> 全学的な授業公開・授業参観への積極的参加を呼び掛ける。<br><input type="checkbox"/> FD シンポジウム、FD 講習会への積極的参加を呼び掛ける。<br><input type="checkbox"/> 初年次～2年次にわたる「学士力ゲートウェイゼミナール」たる総合演習 1～4 を充実させるべく検討を引き続き行っていく。 |
| 活動報告                              | <div>組織自己評価 ※1 ○</div> <p>アクティブ・ラーニングについては、実行する教員も増え、また manaba システムに対する理解も進んできた。FD シンポジウムへの出席者も漸増しつつある。</p>                                                                                                                                                                                                                              |

| 課題 4 履修指導や学修支援（中退予防対策など） |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                    |
|--------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 活動計画                     | <input type="checkbox"/> 入学前教育の業者選定について、不断に検討・見直しを行う。<br><input type="checkbox"/> 入学前教育のための提出課題と作業の内容について、さらに検討する。<br><input type="checkbox"/> 入学前教育の成績と入学後の成績の連関について、分析と検討を行う。<br><input type="checkbox"/> 入学後は、アチーブメントテストやその結果によって不本意感を生じさせぬようにするべく、クラス分けについては十分配慮する。<br><input type="checkbox"/> 中退抑制については、ゼミ担当教員、学年担任、学年担当職員が情報を共有して、こまめに面談に取り組む。のみならず、心理カウンセラー、キャリアコンサルタントなどとも連携し、総合的に取り組む方策を検討する。<br><input type="checkbox"/> 初年次～2年次にわたる「学士力ゲートウェイゼミナール」たる総合演習 1～4 はリメディアル教育の場でもあり、いっそう充実させるべく検討を引き続き行っていく。 |
| 活動報告                     | <div>組織自己評価 ※1 ○</div> <p>入学前教育については積極的に行うことができた。退学対策については、学年担任、学年担当職員の連携のもとに、きめ細かく行っているが、先方の事情もあり、引き留めが困難な状況も多々ある。また本学部は、留学による休学希望者が多いことも特色である。</p>                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                               |

| 課題 5 FD への学生の取り込み（TA、授業支援学生など） |                                                                                                                                                                                                                  |
|--------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 活動計画                           | <input type="checkbox"/> 授業アンケートを活用し、授業改善に取り組む。<br><input type="checkbox"/> 留学生支援の目的で作られている「アジア・フレンズ」という本学部独自の自主的<br>学生組織などを活用し、SA へと発展させるべく検討する。<br><input type="checkbox"/> 大学院グローバルアジア研究科とも連携し、TA について検討を続ける。 |
| 活動報告                           | 組織自己評価 ※1    △                                                                                                                                                                                                   |
|                                | 授業アンケートの活用は、シラバス作成の際に連動して十分に行われているが、<br>SA、TA については道半ばである。                                                                                                                                                       |

| 課題 6 学生の学修成果の把握 |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                |
|-----------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 活動計画            | <input type="checkbox"/> 1 年次・2 年次における「総合演習 1～4」、3 年次・4 年次における「21 世紀ア<br>ジア学演習 1～4」という、本学部のゼミナール科目を活用し、学修成果を可視化<br>して把握できるような共通ガイドライン作りを検討する。<br><input type="checkbox"/> 生涯学習センターとも連携し、資格講座への受講を促す。<br><input type="checkbox"/> 学外・社会において多数多種開催されている諸々の「検定」等を利用することを<br>検討する。（受験料等の予算措置が必要であればそれを検討する）<br><input type="checkbox"/> ルーブリックの全学統一的整備を働きかける。<br><input type="checkbox"/> 学修ポートフォリオの全学統一的整備を働きかける。 |
| 活動報告            | 組織自己評価 ※1    △                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                 |
|                 | 総合演習については、学修成果の可視化が進んできているが、本格的なルーブリッ<br>クやポートフォリオの運用に関しては、全学のガバナンスの方針に従う必要もあ<br>り、緒についたところである。                                                                                                                                                                                                                                                                                                                |

## 【機関名】 経営学部

## 1. FD 組織

|     |        |
|-----|--------|
| 名 称 | FD 委員会 |
| 構成員 | 専任教員全員 |

## 2. 活動報告

|      |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                          |   |
|------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---|
| 課題 1 | 3 つのポリシーの周知と理解                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                           |   |
| 活動計画 | <ul style="list-style-type: none"> <li>3 つのポリシーの策定及び運用に関するガイドラインの内容を学部内で周知する取組みを行う。</li> <li>カリキュラム委員会を中心に、3 つのポリシーを改善し完成度をあげる。</li> <li>学部ホームページで 3 つのポリシーを公開する。</li> </ul> <a href="http://www.kokushikan.ac.jp/faculty/BA/about/policy.html">http://www.kokushikan.ac.jp/faculty/BA/about/policy.html</a>                                             |   |
| 活動報告 | 組織自己評価 ※1                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                | ○ |
|      | <ul style="list-style-type: none"> <li>3 つのポリシーをオープンキャンパスで説明するなど、周知した。</li> <li>カリキュラム委員会を中心に、3 つのポリシーについて議論した。</li> <li>学部ホームページで 3 つのポリシーを公開している。</li> </ul> エビデンス : <ul style="list-style-type: none"> <li><a href="http://www.kokushikan.ac.jp/faculty/BA/about/policy.html">http://www.kokushikan.ac.jp/faculty/BA/about/policy.html</a></li> </ul> |   |

| 課題 2 初年次教育 |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                               |
|------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 活動計画       | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 「フレッシュマン・ゼミナール」や「ゼミナール入門」において、初年次教育に取り組む。</li> <li>➤ プレゼンテーションやディスカッション等の口頭発表の技法を身につけさせる。</li> <li>➤ 学問や大学教育全般に対する動機づけを行う。</li> <li>➤ 論理的思考や問題発見・解決能力を向上させる。</li> <li>➤ 将来の職業生活や進路選択に対する動機づけ・方向づけを促す。</li> <li>➤ 大学内の教育資源（図書館を含む）の活用方法を身につけさせる。</li> <li>➤ ディスカッションやグループ・ワークの進め方を身につけさせる。</li> </ul> |
| 活動報告       | 組織自己評価 ※1 ○                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                   |
|            | <p>「フレッシュマン・ゼミナール」と「ゼミナール入門」それぞれにおいて、活動計画に盛り込まれた内容全てを網羅する授業構成を行い、適切に実施された。</p> <p>エビデンス：シラバス、経営学部 FD 活動実施報告書_フレゼミ反省会、経営学部 FD 活動実施報告書_ゼミナール入門反省会</p>                                                                                                                                                                                           |

| 課題 3 授業方法の改善（アクティブ・ラーニングの導入及び推進等） |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                         |
|-----------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 活動計画                              | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 個々の教員によるアクティブ・ラーニングの実践事例をミニワークショップや報告会等により学部内で共有する。</li> <li>・ 全学的な授業公開・授業参観に積極的に参加する。</li> <li>・ 授業支援システム「manaba」「respon」「授業支援ボックス」等の ICT の授業での活用を促進する。</li> </ul>                                                                                                                                            |
| 活動報告                              | 組織自己評価 ※1 ○                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                             |
|                                   | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 学部 FD 活動として「フレッシュマンゼミナール」と「ゼミナール入門」の反省会を実施し、その中で各教員のアクティブ・ラーニングの取り組みを報告してもらった。</li> <li>・ 授業公開は FD 活動の一貫として秋期に 2 つの授業を公開した。</li> <li>・ 必修科目である「経営学総論」では、毎回の授業後に、授業内容の理解や定着を目的として、manaba にて小テストを実施した。</li> </ul> <p>エビデンス：経営学部 FD 活動実施報告書_フレゼミ反省会、経営学部 FD 活動実施報告書_ゼミナール入門反省会、FD 委員会議事録、manaba の「経営学総論」のフォルダ</p> |

| 課題 4 履修指導や学修支援（中退予防対策など） |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                            |
|--------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 活動計画                     | <p>①入学前教育</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 業者選定及び課題等を選定する際に教員が主体的に関与して行う。</li> <li>・ 入学前教育の進捗管理及び成績管理に教員が積極的に関与する。</li> </ul> <p>②リメディアル教育</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 株式会社ワオ・コーポレーションの入学事前教育（e-Learning による日本語表現法、および、英語）を行う。</li> </ul> <p>③オフィスアワー等</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 各教員にオフィス・アワーを設け、学生に担当教員のオフィス・アワーを活用するよう助言する。</li> <li>・ 履修指導においては、教員と学部事務局担当者らとの円滑な連携・情報共有体制を構築して進め、中退者の抑制を図る。</li> </ul> |
| 活動報告                     | <p>組織自己評価 ※1 ○</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ オフィス・アワーの周知について適切に実施された。</li> <li>・ 中退予防策として、学部事務局担当者らと連携し、学年担任による学業不振者に対する面談を実施した。</li> <li>・ 入学前教育、リメディアル教育について適切に実施された。</li> <li>・ 「ゼミナール入門」において経営学部カリキュラムマップを配布し、翌年度の履修計画について指導を行った。</li> </ul> <p>エビデンス：教授会議事録、「ゼミナール入門」配布資料</p>                                                                                                                                                          |

| 課題 5 FD への学生の取り込み（TA、授業支援学生など） |                                                                                                                    |
|--------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 活動計画                           | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ TA・SA を積極的に活用する。</li> <li>・ 授業アンケート等で得られた学生の意見を取り入れた授業改善に取り組む。</li> </ul> |
| 活動報告                           | <p>組織自己評価 ※1 ○</p> <p>全て適切に実施された。</p> <p>エビデンス：教授会議事録</p>                                                          |

| 課題 6 学生の学修成果の把握 |                                                                                                                                                                                                                                                                                                         |
|-----------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 活動計画            | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 資格試験や検定試験の試験結果を把握し、学生の学修成果を把握する。</li> <li>・ グループ・ワークなどのアクティブ・ラーニングの実施において、個人単位での評価方法を確立する。</li> </ul>                                                                                                                                                          |
| 活動報告            | <div>組織自己評価 ※1    △</div> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 学生の学習成果の把握は適切に実施された。</li> <li>・ アクティブ・ラーニングの実施における個人単位の評価については、学部 FD 活動として実施された「フレッシュマンゼミナール」の反省会において討議されたが、評価方法の確立にまでは至らなかった。従って引き続き検討を行い、令和 2 年度の課題とする。</li> </ul> <p>エビデンス：経営学部 FD 活動実施報告書_フレゼミ反省会、経営学部 FD 活動実施報告書_ゼミナール入門反省会</p> |

## 【機関名】 政治学研究科

## 1. FD 組織

|     |                        |
|-----|------------------------|
| 名 称 | (特定の組織は無し)             |
| 構成員 | 研究科長 平石正美      主任 小池亜子 |

## 2. 活動報告

| 課題 1 | 3 つのポリシーの周知と理解                                                                                                     |   |
|------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---|
| 活動計画 | 政治学研究科ホームページ「教育研究上の目的・方針」で公開している 3 ポリシーについて、年度当初の研究科委員会において文書を配付して確認し、各教員が研究科の教育理念に基づいた指導計画を実施するよう、教職員全体での共通理解を図る。 |   |
| 活動報告 | 組織自己評価 ※1                                                                                                          | ◎ |
|      | 研究科委員会にて、3 ポリシー及びカリキュラムについて確認し、研究科全体での共通理解を深めた。                                                                    |   |

| 課題 2 | 授業方法の改善（アクティブ・ラーニングの導入及び推進等）                          |   |
|------|-------------------------------------------------------|---|
| 活動計画 | 政経学部と合同で研修会を定期的実施し、全学の授業公開・参観に積極的に参加するよう、研究科委員会で周知する。 |   |
| 活動報告 | 組織自己評価 ※1                                             | ◎ |
|      | 研究科委員会で学内の研修会や授業公開・参観の実施について周知し、各自参加して授業改善に役立てた。      |   |

| 課題 3 | 履修指導や学修支援（中退予防対策など）                                                                                                                                |   |
|------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---|
| 活動計画 | 指導担当教員のみならず、研究科委員全員のオフィス・アワーを 4 月ガイダンス時に学生に文書配付にて周知し、相談しやすい環境を整える。<br>学生ラウンジに、学生が自由に借りることができる本を配架し、利便性を高める。<br>懇話会を定期的実施し、教員や先輩から学修アドバイスを行う機会を増やす。 |   |
| 活動報告 | 組織自己評価 ※1                                                                                                                                          | ◎ |
|      | 計画通りに実施し、特に、懇話会では学修支援の充実に向けて十分な意見交換を行うことができた。                                                                                                      |   |

| 課題 4 FD への学生の取り込み（TA、授業支援学生など） |                                                                    |
|--------------------------------|--------------------------------------------------------------------|
| 活動計画                           | 年度当初にTAの希望者を募り、これまでの指導補助に加えて、後輩学生への助言や教員の指導体制への改善提案等に関しても積極的に活用する。 |
| 活動報告                           | 組織自己評価 ※1 ○                                                        |
|                                | 現在活用しているTAについては十分に機能しているが、院生の増加に伴い、次年度以降は更にTAを増やし、効果的な指導体制を整える。    |

| 課題 5 学生の学修成果の把握 |                                                                                                                                                                   |
|-----------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 活動計画            | <p>前年度に引き続き、学生1名に対して3名以上の複数指導教員を配置する体制で学修状況の評価を組織的に実施する。</p> <p>修士論文中間報告会や研究生報告会の開催、政経論集への投稿や研究会などでの報告の促進、在籍者を対象とした『研究ブリーフィング』発刊など通じて、学生の学修成果の把握と研究成果の活用に努める。</p> |
| 活動報告            | 組織自己評価 ※1 ◎                                                                                                                                                       |
|                 | 計画通り、複数指導教員体制で指導したことにより、よりよい修士論文作成の指導ができた。『研究ブリーフィング』は3月に発行予定である。                                                                                                 |

【機関名】 経済学研究科

1. FD 組織

|     |                  |
|-----|------------------|
| 名 称 | 経済学研究科 FD 委員会    |
| 構成員 | 経済学研究科専任教員（課程委員） |

2. 活動報告

| 課題 1 | 3 つのポリシーの周知と理解                                                                                                                                                                                                                                                      |
|------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 活動計画 | <p>1. 大学院便覧に記載した 3 つの新ポリシーを研究科委員会内で確認し、4 月のオリエンテーション等を通じて学生への周知徹底を図る。</p> <p>2. 大学院入試において、I 期、II 期とも 3 つのポリシーを再確認しこれに則った入試業務を行うよう各教員に呼びかける。</p>                                                                                                                     |
| 活動報告 | <p>組織自己評価 ※1    ◎</p> <p>1. 3 つのポリシーの加筆・修正を行い、研究科委員会において全委員に対して周知を行うとともに、大学院便覧にも反映させる手続きを行った。4 月のオリエンテーションの際にもこの新ポリシーを確認の上、学生に説明し周知徹底を図った。</p> <p>2. 入試においては、常に 3 つのポリシーを念頭に置き、アドミッション・ポリシーを満たす学生、かつ今後カリキュラム・ポリシーとディプロマ・ポリシーに沿って研究を進めていける見込みのある学生をよく見極めるよう心掛けた。</p> |

| 課題 2 | 授業方法の改善（アクティブ・ラーニングの導入及び推進等）                                                                                                                                                                                                                         |
|------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 活動計画 | <p>1. 各教員が講義・演習において一方向的に教えるのではなく、学生を主体として積極的に発言・報告等を求め、質疑応答、ディスカッション、ディベート、グループ・ワーク等を実施するよう委員会の場などで繰り返し呼びかける。</p> <p>2. 政経学部との共催で FD 講習会を開き、アクティブ・ラーニングの事例紹介や実践に参加してノウハウを身につける。</p>                                                                  |
| 活動報告 | <p>組織自己評価 ※1    △</p> <p>1. 委員会の場で特に繰り返し呼び掛けることはしなかったが、各教員がそれぞれの講義・演習において主体的に実施している。</p> <p>2. 政経学部の定例教授会後などに FD 講習会を開き、実践例の紹介や意見交換を行なう予定であったが、本年度は教授会後に各種委員会その他のスケジュールが立て込んでおり、実現に至らなかった。ただ、研究科教員の多くが FD 委員会主催の FD 研修会等に参加し、FD に関する多くの有益な情報を得た。</p> |

| 課題 3 履修指導や学修支援（中退予防対策など） |                                                                                                                                                                 |   |
|--------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---|
| 活動計画                     | 1. 各教員のオフィス・アワーの一覧を見やすい場所に常時掲示し、オリエンテーション時にもこの制度を十分に活用するよう学生に呼びかける。<br>2. 欠席が続く学生がいた場合には、委員会等の場で情報を共有し、対策を共に考え実践していく。<br>3. 年間を通じて、指導教授，研究科長，研究科主任の3者が学生の相談にのる。 |   |
|                          | 組織自己評価 ※1                                                                                                                                                       | ◎ |
| 活動報告                     | 1. 計画通りに実施した。<br>2. 休学者については委員会で情報を共有したが、欠席が続く学生は今年度は特に報告されなかった。<br>3. 適宜、実行された。                                                                                |   |

| 課題 4 FD への学生の取り込み（TA、授業支援学生など） |                                                                                                                   |   |
|--------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---|
| 活動計画                           | 1. 教員が積極的に TA を採用できるよう、研究科内部で広く呼びかける。<br>2. TA を採用した教員と執行部との間で随時情報・意見交換を行ない今後に役立てていく。<br>3. 何か特に問題があった場合は、委員会に諮る。 |   |
|                                | 組織自己評価 ※1                                                                                                         | △ |
| 活動報告                           | TA の採用については、十分に周知されており、要望があれば採用に向けて積極的に動く方針ではあったが、本年度は特に要望が出されなかった。                                               |   |

| 課題 5 学生の学修成果の把握 |                                                                                                                                                                                                        |   |
|-----------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---|
| 活動計画            | 1. 講義・演習の中で、学生に対し研究の進捗状況を定期的に報告させ、報告内容に応じてその都度適切な指導を行う。<br>2. 修士2年次以上および博士の学生を対象に論文中間報告会を開催し、他の学生と全教員の参加のもとに口頭発表と質疑応答の訓練をする。教員は、講評を述べるだけでなく各発表者への評価コメントを書面にて提出し、それを発表者にフィードバックする。                      |   |
|                 | 組織自己評価 ※1                                                                                                                                                                                              | ◎ |
| 活動報告            | 1. 各教員が自らの判断で適切に進めている。<br>2. 令和元年9月28日（土）に修士論文・博士論文中間発表会を実施した。修士課程2年次以上の学生6名と博士課程の学生1名がその他の学生と教員の前で発表を行った。発表後は現状の改善と完成に向けて教員から様々な指摘や助言がなされた。その後、全員で総括会を開き、改めて各教員から講評がなされると共に、各発表者に対するコメント付きの評価表が提出された。 |   |

## 【機関名】 経営学研究科

## 1. FD 組織

|     |                   |
|-----|-------------------|
| 名 称 | 経営学研究科 F D 委員会    |
| 構成員 | 経営学研究科 課程委員（専任教員） |

## 2. 活動報告

| 課題 1 3つのポリシーの周知と理解 |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                       |
|--------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 活動計画               | <p>□ 平成 30 年度に改定された 3 つのポリシーを通じて具体化された入学者の選抜、教育の実施及び修了認定・学位授与の各段階における目標（「P」）が、各ポリシーに基づいて実施される入学者選抜及び体系的で組織的な教育（「D」）を通じて達成されたかどうかを自己点検・評価（「C」）し、学位プログラムについて必要な改善・改革（「A」）を行っていくサイクルを確立して、教育に関する内部質保証を確立することが必要であることを認識し、研究科内での 3 つのポリシーの周知と理解を高める取り組みを行う。</p>                                                           |
| 活動報告               | <p>組織自己評価 ※1 ◎</p> <p>3 つのポリシーを通じて具体化された入学者の選抜に基づいて（「P」）、特に AP1 に基づいて入学者選抜を行うことを徹底し（「D」）、合格者の学力水準をもとに「P」が必ずしも達成できていないと評価し（「C」）、学位プログラムに関して特定課題研究による学位授与の必要性を認識して改善改革を行っている（「A」）。</p> <p>令和元年度において、三つの方針に基づいた履修系統図の見直しについて、懇談のなかで三つの方針について周知徹底を図り、三つの方針に基づいた履修系統図の見直しにより、研究科内で 3 つのポリシーの周知と理解を高める取り組みがなされたと評価している。</p> |

エビデンス 令和元年度第 2～4、第 7～9 回経営学研究科委員会議事録

| 課題2 授業方法の改善（アクティブ・ラーニングの導入及び推進等） |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                  |
|----------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 活動計画                             | <input type="checkbox"/> 個々の教員によるアクティブ・ラーニング等の実践事例を報告会等により研究科内で共有する。<br><input type="checkbox"/> 学内のFD研修会・FDシンポジウムなどでのアクティブ・ラーニングの事例紹介や外部講師による講習会について周知徹底する。<br><input type="checkbox"/> 大学院生に対する学外研修の補助を通じて、発見学習、体験学習、調査学習等による社会的能力、教養、知識、経験等を含む汎用的能力の育成に取り組む。<br><input type="checkbox"/> 大学院生の研究テーマに基づく個別指導が中心となるため、授業公開や相互連携が必要か、今後の検討課題とする。 |
| 活動報告                             | 組織自己評価 ※1 ○<br>FD研修会を開催（研修テーマ「大学院教育の体質改善」）し、学校教育法施行規則の改正・大学院設置基準の改正を踏まえた研修が行われ、改正を見込んだ授業方法の改善について研究科内で意見交換した。                                                                                                                                                                                                                                    |

エビデンス 令和元年度第6回経営学研究科委員会議事録

| 課題3 履修指導や学修支援（中退予防対策など） |                                                                                                                                                                                                       |
|-------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 活動計画                    | <input type="checkbox"/> オフィス・アワーの周知を徹底し、大学院生の活用を促進する。<br><input type="checkbox"/> 年度初めに、専修科目の演習担当教員のもと履修科目を選定し、履修登録を行う履修指導体制に取り組む。<br><input type="checkbox"/> 大学院生自習室などのラーニング・コモンズの有効な活用方法について検討する。 |
| 活動報告                    | 組織自己評価 ※1 △<br>専修科目の演習担当教員に対して履修指導や学修支援について大いに依存しており、研究科全体としての成果についてはまだ得られていない。ゆえに今後の課題であると評価している。                                                                                                    |

| 課題 4 FD への学生の取り組み（TA、授業支援学生など） |                                                                                                                                                                                                                                                                                                |
|--------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 活動計画                           | <input type="checkbox"/> TAを積極的に活用し、大学院生をTAとして経営学部の専門必修科目や専門選択必修科目に参加させることによって、経営学の基礎的知識を再学習する機会を提供するリメディアル教育に努めつつ、学部学生等に対する助言や実施等の教育補助業務を行わせ、大学院生の教育トレーニングの機会を提供するとともに、これに対する手当を支給し、大学院生の処遇改善の一助とするよう取り組む。<br><input type="checkbox"/> 修士論文中間発表会後の懇親の場などを通じて、大学院生の教育に対する意見を汲み上げる機会を設けるよう取り組む。 |
| 活動報告                           | 組織自己評価 ※1 ◎<br>TAを積極的に活用し、大学院生をTAとして経営学部の専門必修科目に参加させることによって、経営学の基礎的知識を再学習する機会を提供するリメディアル教育に努めるなど、FDへの学生の取り組みがある程度なされたと評価している。<br>また、教員・院生合同懇親会を開催して院生の意見汲み上げの機会を設けた。                                                                                                                           |

エビデンス 平成31年度第1回経営学研究科委員会議事録

令和元年度第6回経営学研究科委員会議事録

| 課題 5 学生の学修成果の把握 |                                                                                                                                                                                                                                                                               |
|-----------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 活動計画            | <input type="checkbox"/> 学生の学修成果の把握を組織的に行うため、教務課と連携して、シラバスの内容の充実を図り、研究科委員会などを通じ、各々の講義内容や成績評価方法についての現状と課題を提示し、検討・改善する。<br><input type="checkbox"/> 修士論文審査会における審査採点表において、学生の学修成果が点数に表れているかについて検討する。<br><input type="checkbox"/> 修士論文審査会における審査採点表により、学生の学修成果の客観的な点数による把握を組織的に行う。 |
| 活動報告            | 組織自己評価 ※1 ◎<br>研究科委員会を通じて、シラバスの内容充実などについて意思統一を図った。また、学生の学修成果の把握をより実現するため、修士論文審査会における審査方法を変更した。なお、修士論文の論文審査会に基づいた論文判定に関連して、主任審査員から論文概要と3名の審査員（主査1名、副査2名）による審査概要報告を修了判定会において行うなど、学生の学修成果の把握がある程度なされたと評価している。                                                                    |

エビデンス 令和元年度第7～10回経営学研究科委員会議事録

令和元年度経営学研究科修了・進級判定会議議事

【機関名】 スポーツ・システム研究科

1. FD 組織

|     |                                                                                  |
|-----|----------------------------------------------------------------------------------|
| 名 称 | スポーツ・システム研究科 FD 委員会                                                              |
| 構成員 | 永吉英記（委員長） 増本達哉（副委員長） 井上誠治（委員）<br>氏家道男（委員） 朝倉利夫（委員） 須藤明治（委員）<br>田原淳子（委員） 熊川大介（委員） |

2. 活動報告

| 課題 1 3つのポリシーの周知と理解 |                                                                                                                                                             |
|--------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 活動計画               | <ul style="list-style-type: none"> <li>● 3つのポリシー共通理解・周知のための打合せ会を開催する。</li> <li>● 3つのポリシーの展開に向けた具体的行動について「将来計画等検討委員会」で検討したうえで、研究科内で協議する。</li> </ul>          |
| 活動報告               | 組織自己評価 ※1 ◎                                                                                                                                                 |
|                    | <p>◎ 3つのポリシーが便覧・カリキュラム等に適用されているかを PDCA サイクルに基づいて取り組みを行った。</p> <p>◎ スポーツ・システム研究科 FD 委員会内規を作成した。</p> <p>◎ 研究科委員会に置いて 3 ポリシーの展開に向けた具体的取り組みについて共通理解・周知を図った。</p> |

| 課題 2 授業方法の改善（アクティブ・ラーニングの導入及び推進等） |                                                                                                                                                                                                                                         |
|-----------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 活動計画                              | <ul style="list-style-type: none"> <li>● 「manaba」「respon」について、全教員と研究科助手への講習会を実施する。また、具体的な授業での活用方法等、個別の活用相談を FD 委員が受け付ける。</li> <li>● 研究科内での合同研究発表会や勉強会をラーニング・コモンズスペースで実施し、さらなる活用の可能性について検討する。</li> </ul>                                 |
| 活動報告                              | 組織自己評価 ※1 ○                                                                                                                                                                                                                             |
|                                   | <p>◎ 「manaba」「respon」について、年度当初の非常勤講師を含めた全教員対象の「体育学部教員打合せ会」にて講習会を実施した。また、教員了承のもとに研究科助手が manaba にアクセスできるようシステム変更を行い、実際に資料配布、レポート提出や論文指導を行いながら manaba の使用方法について理解を深める取り組みを行った。</p> <p>△ ラーニング・コモンズスペースの授業に対して、より積極的に活用していくための取り組みを行った。</p> |

| 課題 3 履修指導や学修支援（中退予防対策など） |                                                                                                                                                                                               |
|--------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 活動計画                     | <ul style="list-style-type: none"> <li>● 「manaba」によるポートフォリオの活用として、主にレポートの提出・添削・評価・保存の具体的方法について個別に相談を受け、全教員の活用を目指す。</li> <li>● 学習意欲と学習効果を向上するためのラーニング・コモンズスペースと「manaba」の活用をより充実させる。</li> </ul> |
| 活動報告                     | <div>組織自己評価 ※1 ○</div> <p>△ラーニング・コモンズスペースをより積極的に活用した。</p> <p>◎研究科助手の manaba アクセスを可能にし、履修指導や学修支援、進路相談等の対応を行った。</p>                                                                             |

| 課題 4 FD への学生の取り込み（TA、授業支援学生など） |                                                                                                                                              |
|--------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 活動計画                           | <ul style="list-style-type: none"> <li>● TA を積極的に活用する。</li> <li>● 大学院生の教育に対する意見を汲み上げるための場を増やす。</li> <li>● 大学院生の意見を取り入れた授業改善に取り組む。</li> </ul> |
| 活動報告                           | <div>組織自己評価 ※1 ○</div> <p>○TA をより活用していけるよう、全教員に対して TA についての説明と来年度申請書を配布した。</p> <p>○来年度から「研究科長と話す会」を開催し、大学院生の意見を取り入れた授業改善に取り組むこととした。</p>      |

| 課題 5 学生の学修成果の把握 |                                                                                                                                                                                                                             |
|-----------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 活動計画            | <ul style="list-style-type: none"> <li>● 学修成果を把握する方法として、口頭試験と論文発表会を実施する。</li> <li>● 大学院生の学会発表等への積極的参加の呼びかけと、学会発表活動に対する補助金等の相談を研究科助手及び事務にて行う。</li> <li>● 日本体育大学・東京女子体育大学・国士舘大学における 3 大学大学院合同の研究発表会に参加し学修成果の把握を行う。</li> </ul> |
| 活動報告            | <div>組織自己評価 ※1 ◎</div> <p>○来年度より、学修ポートフォリオを作成し学習成果を把握することとした。</p> <p>◎修士論文中間発表会及び日本体育大学・東京女子体育大学・国士舘大学における 3 大学大学院合同の研究発表会を開催し学習成果の把握を行った。</p>                                                                              |

## 【機関名】 救急システム研究科

## 1. FD 組織

|     |                |
|-----|----------------|
| 名 称 | 救急システム研究科FD委員会 |
| 構成員 | 救急システム研究科担当教員  |

## 2. 活動報告

| 課題 1 |                                                  | 3 つのポリシーの周知と理解 |
|------|--------------------------------------------------|----------------|
| 活動計画 | 本年度は、3 ポリシーが各自のカリキュラムに適用されているかの自己点検自己評価を行う。      |                |
| 活動報告 | 組織自己評価 ※1                                        | ○              |
|      | 自己点検自己評価は終了していないが、2019 年度のカリキュラムにフィードバックする予定である。 |                |

| 課題 2 |                                                                                                                                                                                 | 授業方法の改善（アクティブ・ラーニングの導入及び推進等） |
|------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------|
| 活動計画 | <input type="checkbox"/> 大学学部と異なり、大学院では初年次教育、教養教育を取り上げるのは不適切である。本研究科では2017年度からカリキュラムを大幅に変更したので、今年度もその経過を見守る。<br><input type="checkbox"/> 大学院の講義の中で専門教育、キャリア教育が実際に行えたかを年度末に確認する。 |                              |
| 活動報告 | 組織自己評価 ※1                                                                                                                                                                       | ○                            |
|      | 今年度から分子生物学実験の授業を行っているが、学生は意欲的に授業に取り組んでいる。現在、今年度の経験をベースにさらに次年度以降のカリキュラムについて見直しを行っている。                                                                                            |                              |

| 課題3 履修指導や学修支援（中退予防対策など） |                                                                                                                                                                                                |
|-------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 活動計画                    | 本研究科では、ラーニング・コモンズの利用を推奨している。広いスペースで、すでに大学院、聴講、科目等履修を終了した学生も自由に参加できるように計画する。これは、大学院修了者のキャリアパスの確保と可視化の推進の一部とも考える。また、同期の修士のリーダーがクラス全体をまとめ、海外実習、国内学会への参加等などの機会に現役、OB との交流を促進しもって新規入学者の確保をめざすようにする。 |
| 活動報告                    | 組織自己評価 ※1 ○                                                                                                                                                                                    |
|                         | ラーニングコモンズの利用は本年度も続いて行い、活発なディスカッションが可能になったと考える。学会等での大学院OBとの交流会は今年度の各種学会などでも実施した。今後もこの活動が続ける予定である。                                                                                               |

| 課題4 FD への学生の取り込み（TA、授業支援学生など） |                                                                     |
|-------------------------------|---------------------------------------------------------------------|
| 活動計画                          | 学部の実習に、修士がTAとして参加する。<br>大学院は研究が目的であるので、関連する学会及び研究会への参加を支援する制度を検討する。 |
| 活動報告                          | 組織自己評価 ※1 ○                                                         |
|                               | 修士学生は、将来、教育機関へ就職するものが多いため、TAに積極的に参加した。                              |

| 課題5 学生の学修成果の把握 |                                |
|----------------|--------------------------------|
| 活動計画           | ※この項目は修士にあてはまるか疑問なので、修士では扱わない。 |
| 活動報告           | 組織自己評価 ※1                      |
|                |                                |

## 【機関名】 工学研究科

## 1. FD 組織

|     |           |
|-----|-----------|
| 名 称 | 工学研究科     |
| 構成員 | 工学研究科の全教員 |

## 2. 活動報告

| 課題 1 |                                                                                                                                                                  | 3 つのポリシーの周知と理解                                                                                                                         |
|------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 活動計画 | <input type="checkbox"/> 3 ポリシーについて研究科内での共通理解を高める取り組みを行う。具体的には、研究科委員会で議論する機会を設ける。<br><input type="checkbox"/> シラバス作成のお願いをする時に、3 ポリシーに沿った内容であることを検討しながら入力するように促す。 |                                                                                                                                        |
|      | 活動報告                                                                                                                                                             | 組織自己評価 ※1    ○<br><input type="checkbox"/> 本年度は 3 ポリシーの見直しがあり、3 つのポリシーの理解および運用について専攻主任会や研究科委員会で確認し、各教員の共通理解を得た。またその後、シラバス作成・入力作業にあたった。 |

| 課題 2 |                                                                                                                                                                                                                   | 授業方法の改善（アクティブ・ラーニングの導入及び推進等）                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                    |
|------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 活動計画 | <input type="checkbox"/> 研究科に関連する学問分野におけるアクティブ・ラーニングの事例紹介など、外部講師による講習会を行う。<br><input type="checkbox"/> 授業支援システム「manaba」「respon」「授業支援ボックス」等の ICT の授業での活用を促進する。<br><input type="checkbox"/> 全学的な授業公開・授業参観に積極的に参加する。 |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                 |
|      | 活動報告                                                                                                                                                                                                              | 組織自己評価 ※1    ◎<br><input type="checkbox"/> 外部講師による講習会は実施できなかったが、ミニ FD 研修会は理工学部と合同で実施することができた。また、工学研究科会議の場で所属教員に本学の FD 研修やシンポジウムに積極的に参加を促すアナウンスをした。その様な機会を利用して各教員の教授方法の見直しやスキルアップにつなげるよう促した。第 8 回 FD 研修会には 10 名、第 21 回 FD シンポジウムには 11 名の本研究科委員メンバーが参加した。<br><input type="checkbox"/> 今年度より会議資料などを manaba などを通して配付し、教員の manaba 利用のきっかけ作りにも努めた。<br><input type="checkbox"/> 春・秋とも授業参観の参加を促したが、今年度は授業参観者数は 1 名であった。 |

|      |                                                                                                |                     |  |
|------|------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------|--|
| 課題3  |                                                                                                | 履修指導や学修支援（中退予防対策など） |  |
| 活動計画 | <input type="checkbox"/> 大学院生用のオフィス・アワーの周知・活用を一層促進する。                                          |                     |  |
|      | <input type="checkbox"/> 研究室ごとのミーティングにおいて学修ポートフォリオを作成して指導に活かす。                                 |                     |  |
| 活動報告 | <input type="checkbox"/> 研究室の（主査）教員だけでなく副査の教員との面談を随時実施することで学修支援を強化する。                          |                     |  |
|      | 組織自己評価 ※1                                                                                      | ◎                   |  |
| 活動報告 | <input type="checkbox"/> 各教員が大学院生用のオフィス・アワーを設定し、学生に周知および活用を促した。                                |                     |  |
|      | <input type="checkbox"/> 工学研究科委員会の場合でも随時、修士論文研究計画書の提出状況や修論概要・論文提出状況および就職活動状況など学生の状況報告を実施している。  |                     |  |
| 活動報告 | <input type="checkbox"/> 昨年度導入した主査・副査制度による修士生が本年度修了を迎える。今の所、主査・副査同席による中間発表や面談など上手く学修支援が機能している。 |                     |  |
|      | <input type="checkbox"/> また、今年度「工学研究科長優秀修士論文賞」を設置した。これは、学生の学修意欲促進や教員による学生の学修状況把握にもつながると考えられる。  |                     |  |

|      |                                                                                                                                                                                                   |                           |  |
|------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------|--|
| 課題 4 |                                                                                                                                                                                                   | FD への学生の取り込み（TA、授業支援学生など） |  |
| 活動計画 | <div><input type="checkbox"/> 学部とも連携し、今後も TA を積極的に活用する。</div> <div><input type="checkbox"/> TA を採用した授業担当の教員が TA の意見を汲み上げ、研究科の授業改善に取り組む。</div>                                                     |                           |  |
| 活動報告 | 組織自己評価 ※1                                                                                                                                                                                         | ○                         |  |
|      | <div><input type="checkbox"/> 昨年度同様工学研究科全体で、実験実習科目を中心に TA を積極的に活用した。大学院生同士のつながりを促す機会を設けることはできなかったが、次年度以降も取り組みたい。</div> <div><input type="checkbox"/> TA 採用計画も工学研究科委員会の協議事項として、話し合いが実施されている。</div> |                           |  |

| 課題 5 | 学生の学修成果の把握                                                                                                                                                                                                                                                                                  |   |
|------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---|
| 活動計画 | <input type="checkbox"/> 積極的に学会発表や展示会発表を行い、研究成果を外部に発信することで学生の学習成果を把握する。<br><input type="checkbox"/> 修士論文まとめ時には副査と密に連絡を取るよう指導して、指導教員以外にも学習成果を細かく把握してもらう。                                                                                                                                     |   |
|      | 組織自己評価 ※1                                                                                                                                                                                                                                                                                   | ◎ |
| 活動報告 | <input type="checkbox"/> 専攻ごと学会発表や展示会発表・参加を行い、研究成果を外部に発信した。そのための研究活動や準備を通して、学生の学修成果を把握した。例として、学生の海外研修も、4月電気専攻2名、5月建設専攻1名、6月機械工学専攻3名などをはじめとして積極的に学生の研修も実施した。<br><input type="checkbox"/> 主査の教員は副査の教員と連携して、研究報告書や論文の作成指導をした。<br><input type="checkbox"/> ルーブリックによる論文の審査基準を導入した。客観的な成果の把握に努めた。 |   |

【機関名】 法学研究科

1. FD 組織

|     |                                                                     |
|-----|---------------------------------------------------------------------|
| 名 称 | 法学研究科委員                                                             |
| 構成員 | 入澤充、片山等、五島京子、斉木秀憲、関葉子、高野敏春、滝井伊佐武、辰野文理、西本靖宏、福永清貴、藤巻梓、森田悦史、山本浩美、吉開多一、 |

2. 活動報告

|      |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                       |
|------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 課題 1 | 3つのポリシーの周知と理解                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                         |
| 活動計画 | <p>法学研究科は、最新の法知識をもち、法的紛争の予備知識を身につけた人材、特に専門的な法理論および実務理論を教授・研究して法的業務に従事する高度の職業人を養成することを目的としています。そのことは3つのポリシーを新しく改定し、HPや募集要項にも明記し、委員会でも承認済みで徹底させています。</p> <p>3コース(基幹法コース・税法ビジネスコース・スポーツ法コース)について、これまでも入試説明会（内外問わず年6回実施）・外部で企業人向けのシンポジウム（武漢大学法学院教授招聘）を実施しましたが、さらに内外問わず講演会・企業との研究会を開催し進めていきます。</p> <p>研究科での3ポリシーを踏まえた講義内容・論文作成等について、一層の周知を図り取り組んでいきます。</p> |
| 活動報告 | <p>組織自己評価 ※1 ◎</p> <p>法学研究科は、活動計画に基づいて、3コース(基幹法コース・税法ビジネスコース・スポーツ法コース)を充実させるために、研究科独自のテーマ発表会（2回）、入試説明会（内外問わず年11回実施）・海外の教授による講演会を実施し、学内外問わず、3ポリシーを周知・徹底してきました。</p>                                                                                                                                                                                     |

| 課題 2      | 授業方法の改善（アクティブ・ラーニングの導入及び推進等）                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                             |           |   |
|-----------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------|---|
| 活動計画      | <p>・学位授与の方針は、改定3ポリシーに示されて研究科として承認され、教育課程の体系化（カリキュラムマップナンバリング）についても、会議で承認され解決されています。最終的には、それが修士論文として結実するよう指導している。</p> <p>3 コース制における授業は、知識の修得のみならず、多様な実践能力を必要とするため、指導教員による研究指導を含めたアクティブ・ラーニングも推進し、並びに専門科目担当教員により総合的な法律知識の習得に心がけている。</p> <p>また、少人数教育の利点は、テーマ発表会など教授を含めてグループ・ディスカッションやディベートなども行っています。さらに、質の高い論文を完成させるため、学生の自発的・能動的な学習を促し、法的思考力を含めた指導を行っていきたいと考えています。</p>                     |           |   |
| 活動報告      | <table border="1" data-bbox="290 772 1394 813"> <tr> <td data-bbox="290 772 558 813">組織自己評価 ※1</td><td data-bbox="558 772 1394 813">◎</td></tr> </table> <p>本研究科が求める人材像・職業人養成の目的は、改定3ポリシーに示されている通り、教育課程の体系化（カリキュラムマップナンバリング）にもとづいて、カリキュラム・マップも作成済みであります。</p> <p>3 コース制の導入によって、カリキュラムの体系性をより明確化する組織的な取り組み、並びに法学研究者として必要な資質の開拓を行い、今ある実務問題をめぐって専門教育の連携（グループ・ディスカッションやディベートなど）も実施してきました。</p> | 組織自己評価 ※1 | ◎ |
| 組織自己評価 ※1 | ◎                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                        |           |   |

| 課題 3      | 履修指導や学修支援（中退予防対策など）                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                  |           |   |
|-----------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------|---|
| 活動計画      | <p>本研究科は、少人数教育のため指導教授を中心とし、それに関連する科目の教授・論文指導を副査がサポートしている体制をとっています。</p> <p>全教員が学部と連携して、毎週1回、オフィス・アワーを設けて学生の学修支援をサポートしています。院生が講義や演習内容に質問がある場合には、教員に直接聞いて理解を助長する仕組みがとられています。</p> <p>大学院の中退をめぐっては、ほとんどありませんが、令和元年度2月29日現在、税理士試験が受かり全科目習得して辞めたもの1名、修論作成に手間取って留年している者が2名おります。</p> <p>修士論文として質の高い論文を作成するために、個別指導を含めた少人数教育も行っており、より一層の学習支援を行ないたいと考えています。</p> |           |   |
| 活動報告      | <table border="1" data-bbox="290 1747 1394 1787"> <tr> <td data-bbox="290 1747 558 1787">組織自己評価 ※1</td><td data-bbox="558 1747 1394 1787">◎</td></tr> </table> <p>本研究科では、授業改善に向けての取り組みとして、院生からの研究内容や研究活動に必要とされる研究室の備品等についての意見聴取も行ってきました。さらに授業の改善にむけてシラバス内容のチェック・グループ・ディスカッションやディベートについてなども行い、他大学の事例も紹介しなに努めてきました。</p>                                | 組織自己評価 ※1 | ◎ |
| 組織自己評価 ※1 | ◎                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                    |           |   |

| 課題 4      | FD への学生の取り込み（TA、授業支援学生など）                                                                                                                                                                                                                                                                                                         |           |   |
|-----------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------|---|
| 活動計画      | <p>法学部教育、ならびに、法学研究科教育に TA、SA を積極的に導入してゆきたい。</p> <p>本研究科は、全教員が学部と連携して、毎週 1 回、オフィス・アワーを設けて学生の学修支援をサポートしています。院生が講義や演習内容に質問がある場合には、教員に直接聞いて理解を助長する仕組みがとられています。忌憚なく院生と教員、卒業生との研究会も威力を発揮する。</p> <p>大学院の学修を推し進めるために、ポートフォリオ・ラーニング・コモンズは、今後推し進めていきたいと考えています。</p> <p>修士論文として質の高い論文を作成するために、個別指導を含めた少人数教育も行っており、より一層の学習支援を行ないたいと考えています。</p> |           |   |
| 活動報告      | <table border="1" data-bbox="293 719 555 763"> <tr> <td>組織自己評価 ※1</td><td>○</td></tr> </table> <p>授業支援を推し進めるために、テーマは発表会に教員はもちろん大学院修了生も参加した形で取り組んできました。少しずつですが、ポートフォリオ・ラーニング・コモンズが講義・論文指導においても生かされています。個別指導などは指導教授を中心に学習支援が進められてきました。</p>                                                                                          | 組織自己評価 ※1 | ○ |
| 組織自己評価 ※1 | ○                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                 |           |   |

| 課題 5      | 学生の学修成果の把握                                                                                                                                                                                                         |           |   |
|-----------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------|---|
| 活動計画      | <p>学生の学習成果の把握については、2 コース制をとり、全教員が専修できるが、オフィス・アワーを設けて学生の学修支援をサポートしています。</p> <p>院生が講義や演習内容に質問がある場合には、教員に直接聞いて理解を助長する仕組みがとられています。</p> <p>修士論文として質の高い論文を作成するために、個別指導を含めた少人数教育も行っており、より一層の学習支援を行ないたいと考えています。</p>        |           |   |
| 活動報告      | <table border="1" data-bbox="293 1359 555 1404"> <tr> <td>組織自己評価 ※1</td><td>○</td></tr> </table> <p>質の高い修士論文は、院生の法学研究に関する貪欲な姿勢が必要であるが、担当教員の努力はもちろん、講義担当教員やOB・OGによる論文内容についてのコメントなど、関連する専門的な指導によって学習の成果を図ってきました。</p> | 組織自己評価 ※1 | ○ |
| 組織自己評価 ※1 | ○                                                                                                                                                                                                                  |           |   |

## 【機関名】 総合知的財産法学研究科

## 1. FD 組織

|     |                                                                            |
|-----|----------------------------------------------------------------------------|
| 名 称 | 総合知的財産法学研究科 FD 研修会                                                         |
| 構成員 | 総合知的財産法学研究科委員（10 名）<br>飯田昭夫、三浦正広、飯塚真、小橋昇、小林成光、鷹取政信、中村達也、<br>本山雅弘、渡邊昭成、武田典浩 |

## 2. 活動報告

|      |                                                                                                              |   |
|------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---|
| 課題 1 | 3 つのポリシーの周知と理解                                                                                               |   |
| 活動計画 | 学校教育法施行規則の改正に基づいて新たに策定された 3 つのポリシーについて、月例の本研究科委員会および FD 研修会等において、具体的に運用するガイドラインの内容を周知し、共通理解を深める取り組みを行なう。     |   |
| 活動報告 | 組織自己評価 ※1                                                                                                    | ◎ |
|      | 月例の本研究科委員会および定期的に行われている FD 研修会において、3 つのポリシーの改正に関する検討を通じて、具体的な運用ガイドラインを確認することにより、共通理解を深める取り組みが行われる（委員会議事録参照）。 |   |

|      |                                                                                                                                           |   |
|------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---|
| 課題 2 | 授業方法の改善（アクティブ・ラーニングの導入及び推進等）                                                                                                              |   |
| 活動計画 | 個々の教員によるアクティブ・ラーニングの実践事例を、研究科委員会および FD 研修会等において研究科内で共有する。<br>アクティブ・ラーニングの実践例を紹介し、その導入を促進する。<br>全学的な授業公開・授業参観に積極的に参加し、教員各々の授業方法の検討・改善に努める。 |   |
| 活動報告 | 組織自己評価 ※1                                                                                                                                 | ◎ |
|      | 例年、研究科 FD 研修会において授業方法の改善、修士論文の指導方法等について協議している（委員会議事録参照）。<br>法律学における事例研究、知的財産実務管理等について、具体的なアクティブ・ラーニングが実践されている。<br>授業支援システムが効果的に活用されている。   |   |

| 課題 3 履修指導や学修支援（中退予防対策など） |                                                                                                                                                                               |
|--------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 活動計画                     | <p>入学予定者に対し入学前教育を実施し、入学後すぐに大学院教育になじみ、直ちに学修活動に勤しめるように促す。</p> <p>オフィス・アワーの活用を促進する。</p> <p>学修ポートフォリオの作成に努め、2 年後の修士論文作成に向けた計画的な指導体制を構築する。</p> <p>ラーニング・コモンズを積極的に活用し、学修支援に努める。</p> |
| 活動報告                     | <p>組織自己評価 ※1      ◎</p> <p>オフィス・アワーの時間帯に限らず、指導教授や専門科目担当教員に履修指導や学修支援が積極的に行われている。</p> <p>ラーニング・コモンズを積極的に活用し、履修指導および学修支援が積極的に行われた。</p>                                           |

| 課題 4 FD への学生の取り込み（TA、授業支援学生など） |                                                                                                                                            |
|--------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 活動計画                           | <p>個々の教員が TA を積極的に活用する。</p> <p>学生・教員間のコミュニケーションを促進することにより、教育方法や授業に関する学生の意見を採り入れ、授業の改善に取り組む。</p>                                            |
| 活動報告                           | <p>組織自己評価 ※1      ◎</p> <p>個々の教員が TA を積極的に活用することによって、教育的配慮がなされている。</p> <p>学生とのコミュニケーションを促進することにより、教育方法や授業に関する学生の意見を採り入れ、授業の改善に取り組んでいる。</p> |

| 課題 5 | 学生の学修成果の把握                                                                                                                                                                                         |   |
|------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---|
| 活動計画 | <p>弁理士試験や知的財産管理技能検定試験等の資格試験や検定試験等による客観的な測定方法を用いて、学生の学修成果の把握を組織的に行なう。</p> <p>授業における研究報告・その後の学生・教員間における質疑応答、修士論文作成の指導等を通じ、個々の学生の学修成果の把握に努める。</p> <p>修士論文中間報告会を実施し（計 3 回）、研究科として組織的に修士論文の作成を指導する。</p> |   |
|      | 組織自己評価 ※1                                                                                                                                                                                          | ◎ |
| 活動報告 | <p>弁理士試験、知的財産管理技能検定試験等の客観的な方法により、学生の学修成果を組織的に把握するように努めている。</p> <p>個々の教員が、授業における研究報告や修士論文作成の指導等において、個々の学生の学修成果の把握に努めている。</p> <p>修士論文中間報告会を実施し（計 3 回）、研究科として組織的に修士論文の作成を指導している。</p>                  |   |

## 【機関名】 人文科学研究科

## 1. FD 組織

|     |                                  |
|-----|----------------------------------|
| 名 称 | 大学院幹事会                           |
| 構成員 | 菱刈晃夫、松野敏之、勝田政治、松野彩、助川晃洋、内田順文、千葉昇 |

## 2. 活動報告

|      |                                                                                 |
|------|---------------------------------------------------------------------------------|
| 課題 1 | 3つのポリシーの周知と理解                                                                   |
| 活動計画 | 免許法改正に伴い、年度初めに3つのポリシーを確認・理解した上で、共通理解を高める取り組みをおこなう。                              |
| 活動報告 | 組織自己評価 ※1 ○<br>人文科学研究科幹事会及び委員会で、3つのポリシーを確認し、具体的な取り組みへの努力を確認し、カリキュラムマップ作成に反映させた。 |

|      |                                                                                                             |
|------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 課題 2 | 授業方法の改善（アクティブ・ラーニングの導入及び推進等）                                                                                |
| 活動計画 | 学生数が少ないため、本来のアクティブ・ラーニングをおこなうのは難しいため、少人数の教育に沿ったアクティブ・ラーニングの方法を模索する。                                         |
| 活動報告 | 組織自己評価 ※1 △<br>少人数のため、アクティブ・ラーニングの開発は十分にはおこなえなかったが、報告・レポート等、対話的学習の充実に努力した。特に外国人留学生とのコミュニケーション、指導法開発に工夫を図った。 |

|      |                                                                                                   |
|------|---------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 課題 3 | 履修指導や学修支援（中退予防対策など）                                                                               |
| 活動計画 | オフィス・アワーをはじめ、授業以外の時間でも院生とコミュニケーションの時間を確保し、議論を深めるとともに共通理解と実態把握の充実に努める。<br>ラーニング・コモンズを設定し、その活用を目指す。 |
| 活動報告 | 組織自己評価 ※1 ○<br>少人数指導を活かして、授業以外でも個別相談で顔を合わせて、報告・連絡・相談や個別の進路相談を進めた。                                 |

| 課題 4 FD への学生の取り込み（TA、授業支援学生など） |                                                              |
|--------------------------------|--------------------------------------------------------------|
| 活動計画                           | TA を積極的に活用する。<br>授業時間以外でもオフィス・アワーなどを活用して学生との接点を多くする。         |
| 活動報告                           | 組織自己評価 ※1 ×                                                  |
|                                | TA としての活用は継続して進めているが、院生との交流の声を取り入れているが、授業支援学生など十分には進められなかった。 |

| 課題 5 学生の学修成果の把握 |                                                                       |
|-----------------|-----------------------------------------------------------------------|
| 活動計画            | 院生に対して、研究だけでなく、社会人としての倫理観や発想を身に付けさせる。<br>幅広い知識や論理的な思考、専門的な知識を身に付けさせる。 |
| 活動報告            | 組織自己評価 ※1 △                                                           |
|                 | 修論中間報告会、本最終報告会等を実施し、学修成果の経過報告をおこなった。                                  |

【機関名】 グローバルアジア研究科

1. FD 組織

|     |                                    |
|-----|------------------------------------|
| 名 称 | グローバルアジア研究科（21 世紀アジア学部と一体で活動）      |
| 構成員 | グローバルアジア研究科の教員全員（21 世紀アジア学部と一体で活動） |

2. 活動報告

| 課題 1 | 3 つのポリシーの周知と理解                                                                                                                                                                                                                                                                             |
|------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 活動計画 | <p>□研究科内で3つのポリシーの共通理解を高める取り組みを行う。<br/>他は <b>21 世紀アジア学部</b>に同じ。（以下、21 世アジア学部活動計画に準ずる）</p> <p>□教授会の場で、折に触れ、また繰り返し3つのポリシー策定及び運用ガイドラインの文書を配布し、また口頭でも説明することにより、教員の自覚の深化を図る。</p> <p>□入学定員減、新カリキュラム実施に対応・即応して、さらに研究科内での議論を深化充実させ、3つのポリシーの周知徹底を図る。</p> <p>□研究科内での議論が進むように、FD 実施委員会も働きかけを続けていく。</p> |
| 活動報告 | <p>組織自己評価 ※1      ◎</p> <p>大学院改革として現在、入試方法、奨学金の充実などが話し合われた。また、博士学位後の助教としての採用、定員充足率等、様々な課題についての情報共有が図られた。</p> <p>3つのポリシーについて確認および検討を行った。結果的にはそのままの事になった。</p> <p>上記の活動計画を実施し、研究科内で共通理解を深めた。</p>                                                                                              |

| 課題 2 | 授業方法の改善（アクティブ・ラーニングの導入及び推進等）                                                                                                                                                                                                    |
|------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 活動計画 | <p>□ アクティブ・ラーニングの実践事例をミニ FD など、研究科内で共有する。</p> <p>□ 授業支援システム「manaba」等の ICT の授業での活用を促進する。</p> <p>□ グループ・ディスカッション、グループ・ワーク、調査研究など、少人数を活かしたアクティブ・ラーニングをさらに推進していく。</p>                                                               |
| 活動報告 | <p>組織自己評価 ※1      ○</p> <p>学生数が少ないので、アクティブ・ラーニングを模索し、学生に発表させた。</p> <p>また、授業支援システム「manaba」等を活用した。</p> <p>複数教員による指導の可能性および、学生の研究倫理に関して、構成員全体で意見交換を行った。また、学生の指導上に関すること、および、授業に関しては、分野毎に情報を共有するように努めた。授業内容、授業方法の情報交換を会議前後に実施した。</p> |

| 課題3 履修指導や学修支援（中退予防対策など） |                                                                                                                                                                                                                                                  |
|-------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 活動計画                    | <input type="checkbox"/> オフィス・アワーなど、授業以外の時間でも学生と顔を合わせる時間を多く取る。<br><input type="checkbox"/> 複数の指導教員による研究指導が可能かどうかを検討する。<br><input type="checkbox"/> 教員間で、学生の研究指導に関して情報を共有する。<br><input type="checkbox"/> 履修指導を教職員一体で行い、院生の履修面での課題等を把握、共有し、サポートする。 |
| 活動報告                    | 組織自己評価 ※1 ◎                                                                                                                                                                                                                                      |
|                         | 学生数が少ないので、個別指導や学修支援などを行った。<br>教員間で、学生の研究指導に関して情報を共有し、履修指導を教職員一体で行い、院生の履修面での課題等を把握、共有し、サポートした。                                                                                                                                                    |

| 課題4 FD への学生の取り組み（TA、授業支援学生など） |                                                                                                                                                          |
|-------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 活動計画                          | <input type="checkbox"/> 授業フィードバック等を基に、学生の意見を取り入れ、授業改善に取り組む。<br><input type="checkbox"/> 学生との対話の機会を設ける。<br><input type="checkbox"/> TA・SA を積極的に採用し、活用する。 |
| 活動報告                          | 組織自己評価 ※1 ○                                                                                                                                              |
|                               | 学生の意見を取り入れ、授業改善に取り組んだ。TA として、学部の授業、実習のサポートをお願いした。また、大学からのパンフレットに基づき、TA としての資質向上に努めた。                                                                     |

| 課題5 学生の学修成果の把握 |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                            |
|----------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 活動計画           | <input type="checkbox"/> manaba 等による学修ポートフォリオを活用する。<br><input type="checkbox"/> 年 2 回開催されている研究構想・中間発表会などで教員は学生の学修成果の把握を行うのと同時に、学生が専門的な意見や知識を取り入れ、それをフィードバックできるようにサポートする。<br><input type="checkbox"/> 学生に対して、コミュニケーションスキルや問題解決能力を身に付けさせる。<br><input type="checkbox"/> 研究倫理などを学生に浸透させ、それを研究に活かしているのかどうかを提出物などで把握することを組織的に行う。 |
| 活動報告           | 組織自己評価 ※1 ◎                                                                                                                                                                                                                                                                                                                |
|                | 年 2 回の研究構想・中間発表会などを行った。発表会で教員は学生の学修成果の把握を行うのと同時に、学生が専門的な意見や知識を取り入れ、それをフィードバックできるようにサポートした。また、学生に対して、研究だけでなく、研究成果の発表スキルを身に付けさせた。<br>また、海外実習等の研究成果発表会も実施した。                                                                                                                                                                  |

【機関名】 イラク古代文化研究所

1. FD 組織

|     |                |
|-----|----------------|
| 名 称 |                |
| 構成員 | 岡田保良、小口和美、小口裕通 |

2. 活動報告

| 課題 1 | 附置研究所の目的の周知と理解                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                      |
|------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 活動計画 | <p>◆本研究所は 1976 年 3 月に附置研究所として設置され、同時に学則に基く「国士舘大学イラク古代文化研究所規程」を制定。数次の改正を経て現在に至るまで「イラクを中心とするユーラシアの古代文化の研究を行うこと」という研究目的を規程第 2 条に明示し、今後とも堅持する。</p> <p>◆研究所規程の主旨、およびそれに基づいて実施される事業、すなわち国家社会に貢献する智力と胆力を備えた人材の養成を目的とする本学の教育研究の特色は、研究所独自の調査・資料収集・展示・出版事業・講演会・研究会等の展開を通じて明確に打ち出されるとともに、大学が公開するウェブサイトにおいて積極的に公表、公開を図る。</p> <p>◆学際的かつ学内外の多用な人材が共同して国際的学術研究活動を実施することにより、本学及び研究所自体の社会的評価、および学術的側面の強化につなげる。より具体的には、イラク、ヨルダン、シリア、イラン等の国々、およびそれらの国々に関わる多様な研究者との良好な関係を維持活用した事業計画を遂行し、その周知と理解を図る。</p> |

|      |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                      |   |
|------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---|
| 活動報告 | 組織自己評価 ※1                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                            | ◎ |
|      | <p>◆「イラクを中心とするユーラシアの古代文化の研究を行うこと」という研究目的をイラク古代文化研究所規程第 2 条に明示し、本学の特色ある学術領域として活動を継続し、それらの内容について、大学が設けるウェブサイトおよび独自の出版物、世田谷校舎の展示室を活用してその主旨を公表、公開した。</p> <p>◆上記主旨の実現として、以下の事業を行った。</p> <p>1) 西アジア考古学関係雑誌の継続購入、その他専門図書の購入、海外研究機関との刊行物交換による蔵書の充実。 2) 出版事業として、年度末には『ラーフィダーン』第 41 巻、『文化遺産学研究』No.13 を刊行。 3) 研究所独自の海外事業であるヨルダンとの継続的な共同遺跡調査について、渡航環境が依然として伴わないため、現地スタッフを中心に整理作業を実施。</p> <p>◆21 名の学外研究者の参画を得て、「メソポタミア古代後期文化の研究」「ユーフラテス河中流域の考古学」ほか 2 件の共同研究プログラム体制を継続。金沢大学での「第 25 回ヘレニズム～イスラーム考古学研究会」(7 月)を共同開催。科研事業「古代イランとメソポタミア―歴史地理学的アプローチ」および「イラン出土楔形文字新言語資料―新しい言語データの提出とその言語学的分析」の継続。大阪学院大学研究会「メソポタミア粘土板文書の産地同定と製作プロセスの研究」ならびに「アッシリア浮彫の石材分析から挑む産地同定と復元研究」(6 月)、帝京大学「2019 年度シルクロード学研究会」(1 月)等、学外での学術事業に参加協力。</p> <p>◆4 月、アラブ・ジャパン・デー着席ディナー(ホテルオークラ東京)に小口裕通所長が招待されて列席。</p> <p>◆本学 FD 委員会の指針に従い、研究所員が構成するミニ FD 委員会を毎月の所員会に合わせて定例化することとし、本年度は研究所による出版、共同研究、資料整理、展示など諸事業計画の実施状況の点検を行うとともに、グローバルアジア研究科大学院の修士課程及び博士課程学生の指導方法、提出論文の審査方法について議論した。</p> |   |

| 課題 2 | 研究成果の還元                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                           |
|------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 活動計画 | <p>◆本研究所は、本学大学院グローバルアジア研究科を構成する機関として位置づけられ、3名の専任教員が同専攻の「文化遺産分野」（演習授業、博物館実習のほか、メソポタミア考古学、西アジア史、世界遺産学、文化遺産マネジメント研究等の講義科目）を担当し、各々の研究成果に基づいて大学院生の指導に当たる。他に文学部と21世紀アジア学部でも授業を担当し、歴史遺産の保存をはじめ文化遺産英書講読・ユーラシアの世界遺産・文化遺産マネジメント等の講義、さらには総合演習・21世紀アジア学演習を通じ、学生教育の場において各自の研究成果の還元を図っていく。</p> <p>◆正課外では、楓門祭での報告会、研究所に付設する展示室における公開展示活動、海外の文化遺産保護に関する図書の翻訳出版のほか、上記研究科で継続する研究会活動への参画により、学生・院生への成果の還元を図る。またそれらの多くは学外者にも門戸を開き、社会還元に資するものとする。</p> <p>◆学外の学会や公官庁と協力・連携を図り、本研究所の社会的使命を果たす。関係する学会として、所属教員の個性に応じて、日本オリエント学会、日本西アジア考古学会、日本建築学会、文化財修復学会での社会的活動が期待される。</p> <p>◆またユネスコ（本部及び国内委員会）、文化庁、国際協力機構（JICA）、国際記念物遺跡会議（ICOMOS）、文化遺産保護国際協力コンソーシアムといった公的機関に対して、文化遺産保護の観点から積極的に貢献する。</p> |

|      |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                               |   |
|------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---|
| 活動報告 | 組織自己評価 ※1                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                     | ◎ |
|      | <p>◆本学大学院グローバルアジア研究科を構成する機関として、3名の専任教員が同専攻の「文化遺産分野」（メソポタミア考古学、世界遺産学、文化遺産マネジメント研究等の講義科目のほか、演習、博物館実習など）を担当し、各々の研究成果に基づいて大学院生の指導に当たった。令和元年度は博士課程に2名、修士課程に4名（休学を含む）が在籍し、2名に博士号、3名に修士号を授与。他に文学部と21世紀アジア学部でも授業および演習科目を担当し、歴史遺産の保存をはじめ文化遺産英書講読・ユーラシアの世界遺産・文化遺産マネジメント等の講義、さらには総合演習・21世紀アジア学演習を通じ、学生教育の場において各自の研究成果の還元を図った。</p> <p>◆ 梅が丘展示室において2度の企画展「オリエント研究の最前線 最新調査報告展」（春期）、「古代エジプト、アコリス出土のミイラ展（ミイラのVR体験会）（夏期）、「『甦生』～ベツレヘム聖誕教会 修復事業および発掘調査の軌跡～」(秋期)を実施。</p> <p>◆上記企画展の関連で、8月、10月、11月、12月に都合5回のミニ講座を開催。</p> <p>◆4月、イラク、ズィー・カール大学N.アルシュウェイリー教授、I.ダワード教授がJIAEMの案内で研究所来訪。6月、町田キャンパス図書館にて、来日したイラクの研究者バビロン大学ハイダル・アルマモリ教授（本学学位授与者）とクーファ大学ナシャット・アルハファジ教授を招聘して報告会「イラクにおける歴史的遺産の調査と保護の現状」を開催。</p> <p>◆7月、本研究所とJIAEM主催による特別講演会、宮下佐江子共同研究員による「イラク、ニムルド遺跡 女王墓出土織物の美術史的考察」を開催した。</p> <p>◆9月、駐日イラク共和国大使館とJICA共催によるセミナー『「日本-イラクの歩み」ー外交関係樹立80周年を記念して』（会場：JICA地球ひろば）で、アルムサウィー・イラク大使につづいて所長小口裕通が古代アッシリアの歴史について講演。</p> <p>◆10月、町田キャンパスにて、学生を対象にセミナー「イラクの最新事情：『運輸・交通』から見たイラク新時代」（講師、東懇話会 岡田總氏）を開催。</p> <p>◆1月、本学34号館において世界遺産特別講演会、本研究所岡田保良教授による「世界遺産の過去・現在・未来」を開催。</p> <p>◆日本オリエント学会、日本西アジア考古学会、日本建築学会、文化財修復学会等、所属教員の個性に応じた学術研究を通じて、学外での情報と成果の発信に努め、ユネスコ（本部及び国内委員会）、文化庁、国際協力機構（JICA）、国際記念物遺跡会議（ICOMOS）、文化遺産国際協力コンソーシアムといった公的機関に対して、文化遺産保護の観点からさまざまな貢献を果たした。</p> <p>◆国内各地での世界遺産保護、及び今後の登録推薦事業に対し、様々な立場から協力、支援を継続している。</p> |   |

【機関名】 武道・徳育研究所

1. FD 組織

|     |       |
|-----|-------|
| 名 称 |       |
| 構成員 | 小森富士登 |

2. 活動報告

| 課題 1 |  | 附置研究所の目的の周知と理解                                                                                                     |   |
|------|--|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---|
| 活動計画 |  | <input type="checkbox"/> 建学の精神に則り、伝統ある日本文化を継承し日本国家の興隆と世界平和に寄与すべく「武道・徳育」の研究と実践・普及を行うことを武道・徳育研究所規程第 2 条に明示し、今後も維持する。 |   |
|      |  | <input type="checkbox"/> 研究所規程の主旨に基づく活動について、研究会・講演会・出版において明確にする。                                                   |   |
| 活動報告 |  | 組織自己評価 ※1                                                                                                          | ◎ |
|      |  | 主旨に基づき、研究会・学会への参加、出版事業として「武徳紀要第 35 号」を刊行。<br>本研究所の使命・目的及び活動内容については、ホームページで公表している。                                  |   |

| 課題 2 |  | 研究成果の還元                                                       |   |
|------|--|---------------------------------------------------------------|---|
| 活動計画 |  | <input type="checkbox"/> 担当科目の受講生に剣道段位、初段から 3 段まで受験させ取得させている。 |   |
|      |  |                                                               |   |
| 活動報告 |  | 組織自己評価 ※1                                                     | ◎ |
|      |  | 研究成果は、正課や機関誌の刊行で還元されている。                                      |   |

【機関名】 防災・救急救助総合研究所

1. FD 組織

|     |                          |
|-----|--------------------------|
| 名 称 | 国士舘大学防災・救急救助総合研究所 FD 委員会 |
| 構成員 | 月ヶ瀬 恭子                   |

2. 活動報告

| 課題 1 附置研究所の目的の周知と理解 |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                       |
|---------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 活動計画                | <p>本研究の使命・目的および研究目的</p> <p><input type="checkbox"/> 国士舘大学生に対する防災教育</p> <p>全学部の新入学生を対象に「防災総合基礎教育」を実施することで災害に対処するための知識の習得、応急手当の方法、一次救命処置法などを指導する。</p> <p>「防災リーダー養成論」では、災害に関わる専門家の方々によるオムニバス形式での授業を開講する。</p> <p>「防災リーダー養成論実習」では、日本赤十字社、警察、消防、地域の方々と連携して防災訓練を実施するほか、宿泊を伴う避難所体験、搬送・トリアージ訓練などの使用訓練を行うなどの実践訓練を実施する。</p> <p><input type="checkbox"/> 「防災士」の養成</p> <p><input type="checkbox"/> 災害ボランティア活動を被災時に行う。</p> <p><input type="checkbox"/> 地域、学校に対する防災教育と活動支援。</p> <p><input type="checkbox"/> 一次救命処置法・応急手当講習およびイベント救護活動</p> <p>例：学校における心肺蘇生法講習、市民マラソン等の救護</p> <p><input type="checkbox"/> 日本赤十字社との協定に基づく連携、地域への貢献</p> <p><input type="checkbox"/> 海外の防災・救急医療機関と協力して教育を行う。</p> <p><input type="checkbox"/> 防災シンポジウムの開催</p> <p><input type="checkbox"/> 「国士舘防災・救急救助総合研究」紀要の発行</p> <p><input type="checkbox"/> 将来計画</p> <p>2020 年の東京オリンピック・パラリンピックに向けた応急手当講習プログラムの企画。</p> |
|                     | <p>組織自己評価 ※1      ◎</p> <p>活動計画で挙げた本研究所使命、目的については、議事録を添付する。</p>                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                       |

| 課題 2      | 研究成果の還元                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                           |           |   |
|-----------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------|---|
| 活動計画      | <p>□ 本研究内容・研究成果を大学全学部において入学生を対象に「防災総合基礎教育」では災害に対処するための知識の習得、応急手当の方法、一次救命処置法を指導。</p> <p>「防災リーダー養成論」では、災害に関わる専門家の方々によるオムニバス形式での授業を開講する。</p> <p>「防災リーダー養成論実習」では、日本赤十字社、警察、消防、地域の方々と連携して防災訓練を実施するほか、宿泊を伴う避難所体験、搬送・トリアージ訓練などの使用訓練を行うなどの実践訓練を実施することで、学生教育の効果向上に還元していく。</p> <p>□ 平成 29 年度からは、当該科目受講生に「特定非営利活動法人日本防災士機構」発行の「防災士」の資格が取得できるようになっており、平成 31 年度は引き続きキャリア教育において、防災士の受験資格を出すなどして、学生に還元していく。</p> <p>□ 本研究内容・研究成果を、FD への学生の取り込みをはかるため、オリエンテーションを通じて、関連情報の周知徹底をはかる。</p> <p>□ (研究内容)・(研究成果)を学内の「防災シンポジウム」を防災関連機関の専門家、災害支援経験者、業績間の担当者などの方々を招き、開催することで社会に還元していく。</p> <p>□ 防災訓練、防災教育においては、消防・警察・公立幼稚園・小学校・中学校・高校などの公官庁へ赴き、AED 設置や使用方法の研修、一次救命処置法の研修、世田谷区、多摩市などの公立小学校の防災訓練の協力や、小中学校の修学旅行などに本研究所の救命士が付添支援を行うことで、本研究内容・研究成果を社会に還元していく。</p> |           |   |
| 活動報告      | <table border="1" data-bbox="290 1384 1394 1429"> <tr> <td data-bbox="290 1384 558 1429">組織自己評価 ※1</td> <td data-bbox="558 1384 1394 1429">◎</td> </tr> </table> <p>活動計画で挙げた研究成果の還元については、議事録をエビデンスとして添付する。</p>                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                    | 組織自己評価 ※1 | ◎ |
| 組織自己評価 ※1 | ◎                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                 |           |   |